

徳島県文化財調査概報

昭和58年度

(1983)

徳島県教育委員会

序

本書は、徳島県教育委員会が昭和58年度に実施した埋蔵文化財調査概報であります。

大毛島遺跡は、旧石器時代から江戸時代にかけての遺構や遺物が検出され、この時代の鳴門市地域の文化を解明する上で重要な資料を得ることができました。

本書には、調査の完了した「大毛島第33・35・38区遺跡（仮称）」の発掘調査の概要のみを記録することにしました。

なお、本調査にあたって多大の御協力と御援助を賜った関係機関、特に本州四国連絡橋公団鳴門工事事務所、並びに地元住民の方々に対し、厚くお礼を申し上げます。

昭和60年3月31日

徳島県教育委員会

教育長 中 田 清 春

「大鳴門橋」架橋関連工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査

大毛島33. 35. 38区遺跡（仮称）

例 言

- 1 本書は大鳴門架橋に関連した国道28号線改良工事に伴う発掘調査概要報告である。
- 2 発掘調査は、本州四国連絡橋公団鳴門工事事務所の要請をうけて徳島県教育委員会文化課が実施した。
- 3 本書に収録した大毛島第33・35・38区遺跡は、昭和58年4月1日から昭和59年3月25日まで行った。
- 4 収録した資料の実測は、遺構は調査員が分担し、遺物は大宮、木村、西谷、益岡、佐藤、中西、白井、河野、撮影は松永が主として行った。
- 5 本書で用いた絶対高は標高をあらわし、方位はすべて磁北である。
- 6 今回の一連の調査において、徳島県文化財保護審議会の森浩一委員(同志社大学)、秋山泰委員、大橋康二氏(九州陶磁文化館)ならびに立花博氏、菅原康夫氏(県教委文化課)の各氏から御指導と御教示をうけた。

また飲料水及び駐車場については、鳴門東小学校、鳴門警察署にお世話になり誌上をもってお礼を申しあげる次第である。

- 7 調査は以下の組織で行った。

調査主体 徳島県教育委員会文化課

調査事務局 清水 博(文化課庶務係長)

大八木芳子(文化課事務主事)

調査総括 松永 住美(文化課社会教育主事)

調査担当 松永 雅行(文化課研修生)

調査員 河野 雄次(文化課文化財調査員)

益岡秀樹、白井 滋、西谷俊則、佐藤 健、中西俊治

(文化課調査員・当時)

作業員 市川栄二、岡本増吉、川口重治、中長偉臣、南谷俊朗、谷 展一、武 富雄、大岩正幸、木下 明、野上幸夫、浜 徹、島田一夫、廣田富太郎、山田 勉、新開玉枝、大頭碧江、中長米子、益井タカ子、鹿島季子、北野清子、高橋八千代、福居恵美子、今井喜美子、豊田フミ子、藤井千賀子、斎藤房子、大崎孝仔、山本 実

大毛島第33, 35, 38区遺跡（仮称）目次

〈本 文〉

I	遺跡の位置と環境	1
II	調査の経過	2
III	大毛島第33区遺跡の地形と現状	3
IV	基本層序	4
V	大毛島第35区遺跡の地形と現状	4
VI	基本層序	4
VII	遺構	
	a 石切鍛冶仕事場跡遺構	6
	b 下部石列状遺構	6
VIII	遺物	6
IX	大毛島第38区遺跡の地形と現状	10
X	基本層序	10
XI	遺構	
	土塁状遺構	12
XII	遺物	12
VIII	まとめ	
	1 包含層出土遺物について	14
	2 石切鍛冶仕事場遺構について	15
	3 土塁状遺構について	15

挿 図 目 次

Fig. 1	大毛島第33, 35, 38区遺跡と周辺の遺跡……………21
Fig. 2	第33区地形測量図・トレンチ配置図……………22
Fig. 3	第33区第1・2トレンチ土層図……………23
Fig. 4	第35区地形測量図・トレンチ配置図……………折り込み
Fig. 5	第35区第1・4トレンチ土層図……………25
Fig. 6	第35区第2・3トレンチ土層図……………26
Fig. 7	第35区石切鍛冶仕事場跡遺構 第1図……………折り込み
Fig. 8	第35区石切鍛冶仕事場跡遺構 第2図……………折り込み
Fig. 9	第35区フィグ場跡実測図……………27
Fig. 10	第35区下部石列状遺構実測図……………28
Fig. 11	第38区地形測量図・トレンチ配置図……………折り込み
Fig. 12	第38区A・Bトレンチ土層図……………29
Fig. 13	第38区C・Dトレンチ土層図……………30
Fig. 14	第38区土塁状遺構実測図(1)……………31
Fig. 15	第38区土塁状遺構実測図(2)……………折り込み
Fig. 16	第35区出土陶磁器……………33
Fig. 17	第38区出土陶磁器・土師器・弥生土器……………34
Fig. 18	第35区出土石切用具・矢(1)……………35
Fig. 19	第35区出土石切用具・矢(2)……………36
Fig. 20	第35区出土石切用具・矢(3)……………37

Fig. 21	第35区周辺出土鍛冶用具・石切用具……………	38
Fig. 22	第35区出土鉄製品・金床台……………	39
Fig. 23	第35・38区出土遺物……………	40
Fig. 24	第35区出土土師質行火……………	41

表 目 次

表 1	第35区, 38区出土陶磁器観察表……………	45
表 2	第38区出土土師器・弥生土器観察表……………	48

図 版 目 次

PL. 1	第33区全景写真, 第35区全景写真
PL. 2	第35区石切鍛冶仕事場跡写真
PL. 3	第35区フィゴ場跡(1, 2号)写真
PL. 4	第35区石切鍛冶仕事場跡写真
PL. 5	第35区フィゴ場跡(2号), 灰捨て場跡写真
PL. 6	第35区下部石列状遺構, 調査風景写真
PL. 7	第38区全景, 発掘前写真
PL. 8	第38区土塁状遺構写真
PL. 9	第38区土塁状遺構写真
PL. 10	第38区土塁状遺構部分写真

PL. 11	第38区A・Bトレンチ, 土層写真
PL. 12	第38区A・B・Dトレンチ写真
PL. 13	第38区Aトレンチ土器出土状況写真
PL. 14	第35区出土陶磁器
PL. 15	第38区出土陶磁器
PL. 16	第38区出土土師器・弥生土器
PL. 17	第35区出土石切用具・矢
PL. 18	第35区周辺出土鍛冶用具・石切用具
PL. 19	第35区出土遺物
PL. 20	第35区出土遺物

I 遺跡の位置と環境

大毛島33、35区は、鳴門市鳴門町土佐泊浦大字黒山字黒山、38区は土佐泊大字野字大谷の大毛島内に位置する。

大毛島は、南北に細長く大毛山系が連なり、東側は直線状の砂浜の海岸線となり、西側は瀬戸内海が複雑に入り組んだ磯の海岸線となっている。

第33、35、38区は大毛島山系の東側の山すそ、砂浜にあり、地目は、現在33区は畑地、荒地、35区は荒地、38区は山林となっている。東は紀伊水道を望み、北は鳴門海峡、淡路島が望める。

大毛島内においては、旧石器時代から江戸時代までの遺跡及び遺物出土地が確認されている。

旧石器時代では、小鳴門海峡海底遺跡より後期旧石器、サヌカイト製石核1点、剥片2点、搔器1点が、化石木及び貝殻類を含む土層から出土している。これは、化石木の¹⁴C年代測定値23,180±y.B.P.を上限とする遺物と考えられる。

縄文時代では、大毛島第29・30区遺跡からサヌカイト製石鏃、搔器等が出土している。

弥生時代では、鳴門公園千疊敷下遺跡、大毛島第8・10・21・22・27・28・29・30・39及び今回調査した33・38区より土器・石器が出土している。29区からは円礫遺構に伴って出土している。

古墳時代では、納言山古墳群、亀浦北山古墳群、松瀬崎古墳群があり、ほとんどが組合式石棺を伴った、小規模古墳である。

奈良・平安時代では、土佐泊庵寺（平安時代前期）から唐草文軒平瓦が出土している。

鎌倉・室町時代では、土佐泊城跡がある。

江戸時代では、第21区から屋敷跡、神社跡、今回調査した第35調査区からは、石切鍛冶仕事場跡、第38区からは、土壘状の遺構が検出された。また、第21区からは多量の近世陶磁器が出土している。

ウチノ海、小鳴門海峡に面した島々の遺跡としては、島田島に室古墳群、田ノ浦古墳群、阿波井神社古墳群、島向古墳、高島においては竹島古墳群が記録されている。

現在までの調査の状況から見て、大毛島内での遺跡は山系の山頂、山裾、半島先端、海岸線近くにまで確認されており、今後の調査についての示唆を与えたものと思われる。

II 調査の経過

国道28号線改良工事に伴う埋蔵文化財調査は、昭和52年4月28日から5月20日にかけて分布調査を行い計39ヶ所の遺跡の存在あるいは可能性のある地点を確認した。

その結果に基づいて本州四国連絡橋公団との協議により、工事着手前に発掘調査及び立会調査を行うこととして現在に至っている。発掘調査は、昭和52年度に1区、3区、4区の立会調査と2区、6区の北半分、昭和53年度に5区、6区の南半分、7区、昭和54年度に16区の南半分、21区の南半分、昭和55年度に39区、昭和56年度に11区、12区、13区、14区、22区、23区、24区、25区、26区、の発掘調査、16区の北半分、17区、18区、19区、20区の立会調査、昭和57年度に8区、9区、10区、15区、21区、27区、28区、29区、30区、31区の調査が行われてきた。昭和58年度においては、33区、35区、38区、37区の一部の発掘調査を行った。

その結果、今回は33区、35区、38区の調査報告を行い他は本報告の際に行う予定である。

第33区、35区遺跡は昭和58年4月1日から昭和58年7月9日。第38区、37区一部遺跡は昭和58年11月21日から59年3月24日にわたって行ったものである。

以下調査日誌の概略を記する。

調査日誌抄

- 4月1日 発掘準備。
- 4月7日 33区プレハブ建設、レベル移動。
- 4月8日 道具整理、レベル移動。
- 4月9日 調査区設定(A、Bトレンチ)。
- 4月11日 地形測量及びトレンチ掘り下げ。
- 4月18日 35区伐採開始。
- 4月28日 35区調査区設定(1～4トレンチ)。
- 4月30日 35区レベル移動。
- 5月7日 35区地形測量開始。第1トレンチ掘り下げ。
- 5月17日 35区第1トレンチ土層図作成及びトレンチ写真撮影。
- 5月19日 35区第1トレンチ平面図作成。
- 5月21日 35区第4トレンチ掘り下げ。
- 5月23日 35区第4トレンチ内より石垣状の遺構を確認、染付瓦出土。
- 5月25日 35区第4トレンチの遺構確認の為東側を拡張する。

- 5月26日 35区第4トレンチ検出遺構は石切仕事跡と考えられる。石囲いの中にフィゴ場跡2基が確認された。
- 5月27日 35区石切仕事場の削付作業を行う。
- 5月31日 35区石切仕事場側面図作成。
- 6月2日 35区石切仕事場平面図作成。
- 6月6日 35区トレンチ写真撮影。
- 6月18日 35区灰捨て場検出及び掘り下げ。
- 6月23日 35区第3, 4グリット全景写真撮影。
- 6月30日 35区第4トレンチ下部石列検出。
- 7月4日 35区第4トレンチ下部石列平面図作成。
- 7月9日 33区, 35区道具運搬, 発掘調査終了。
- 7月11日 整理業務を開始する。(出土遺物洗浄, 注記, 実測, トレース等)
- 11月21日 38区37区の発掘準備。
- 11月25日 プレハブ建設。
- 11月30日 38区伐採作業開始。山裾に沿って幅約1mで東西に延びる石垣を検出する。
- 12月8日 38区地形測量を開始。
- 12月13日 38区全景写真撮影, トレンチ設定(A, B, C, Dトレンチ)。
- 12月14日 38区トレンチ掘り下げ開始。
- 12月19日 38区Aトレンチ内より土師器片, 須恵器片等出土する。
- 59年1月9日 38区Aトレンチ写真撮影, C, Dトレンチ掘り下げ。
- 1月24日 38区Bトレンチ内より弥生土器, 流木出土。
- 2月7日 37区全景写真撮影。
- 2月14日 38区A, Bトレンチ土層図作成。
- 2月18日 38区C, Dトレンチ土層図作成。
- 2月22日 38区石垣平面図作成。
- 3月7日 38区石垣平面図, 側面図作成。
- 3月24日 38区発掘調査終了。

III 大毛島第33区遺跡の地形と現状

(Fig. 1, 2, PL. 1)

第33区遺跡(仮称)は, 西側に大毛山系が連なり, 東に紀伊水道が見える傾斜地にあり, 標高13mから18mの高さに位置し, 山裾を開墾し, 畑地となっている。急傾斜地であり, 山系の間の小溪谷の流路にもあたるので何度も氾濫があり地形が変化している。

IV 基本層序 (Fig. 3)

(第1トレンチ)

第1層は10Y R 4/6 褐色砂質土の腐葉土層であり近世陶磁器片、寛永通寶等を包含している。

第2層～第4層は大毛山系からの流入土で無遺物層である。

第5層は10Y R 4/6 褐色砂質土層で砂岩礫混りの流入土で、上部にサヌカイト剥片、弥生土器片等を包含している。良好な遺構を確認することはできなかった。

第6層～第11層は大毛山系から砂岩礫混りの流入土で、無遺物層である。下層は岩盤と思われる。

大毛山系の小溪谷からの土石流が多く、良好な遺構は確認できなかった。

V 大毛島第35区遺跡の地形と現状

(Fig. 1, 4, PL. 1)

第35区遺跡(仮称)は、西側に大毛山系が連なり、東に紀伊水道が見える平坦地にあり、標高10mから16mの高さに位置し、撫養石の石切場跡、石捨て場跡、荒地等となっている。

西側の山は石切場跡で切り立った崖となり、東側は砂地の畑となっている。

VI 基本層序 (Fig. 5, 6)

(第1トレンチ)

第1層は10Y R 4/6 にぶい黄橙色砂質土層(表土)である。

第2層は2.5Y 4/6 にぶい黄色砂層で、火縄銃の鉛玉が出土している。

第3層～5層は砂層で無遺物層である。

(第2, 3トレンチ)

第1層は10Y R 3/6 暗褐色腐葉土(表土)である。

第2層は7.5Y R 4/6 にぶい橙色砂質土層で、砂岩切石を含んでいる。

第3層は2.5Y 4/6 浅黄砂質土層で、砂岩切石を含んでいる。

第4層は10Y R $\frac{3}{4}$ にふい黄橙砂質土層で、大礫を含んでいる。

第5層は2.5Y $\frac{3}{4}$ オリーブ褐色砂層で、無遺物層である。

第2～4層は、砂岩切石の堆積層となっている。

(第4トレンチ)

第4トレンチを基本土層とし、以下に述べる。

第1層は10Y R $\frac{3}{4}$ 暗褐色腐葉土層(表土)である。

第2層～第6層は吹あげ砂の堆積土と思われる。

第7層は10Y R $\frac{3}{4}$ にふい黄橙色砂質土層で、5cm～20cmの砂岩の切石混りである。

第8層は10Y R $\frac{3}{4}$ 明黄褐色砂質土層で、砂岩の崩壊石混りである。

第9層は10Y R $\frac{3}{4}$ にふい黄褐色砂質土層で、5cm～20cmの切石混りである。

第10層は10Y R $\frac{3}{4}$ にふい黄橙色砂質土層で、10cm～20cmの切石混りである。

第11層は2.5Y $\frac{3}{4}$ 浅黄褐色砂質土層で、5cm～20cmの切石混りである。

第12層は10Y R $\frac{3}{4}$ 明黄褐色砂質土層である。

第13層は2.5Y $\frac{3}{4}$ オリーブ褐色砂層である。

第7層～第13層は包含層で近世陶磁器、寛水通寶、鉄製品等を含んでいる。

第14層は10Y R $\frac{3}{4}$ 褐灰色砂層で石切仕事場遺構の遺構面となっている。

第15層は10Y R $\frac{3}{4}$ にふい黄褐色砂層で、無遺物層である。

第16層は10Y R $\frac{3}{4}$ 黒褐色砂層で、炭化物を含んでいる。下部石列状遺構の遺構面となっている。

第17層は10Y R $\frac{3}{4}$ にふい黄橙色砂層で、無遺物層である。

第14層に石切仕事場跡の遺構面が形成され、7層～13層は仕事場形成以降の遺物包含層となっている。

VII 遺 構

第4トレンチ第14層より石問いの石切鍛冶仕事場跡遺構を検出した。仕事場内では壁近くの床面にフィゴ火つば跡2基、仕事場外で灰捨て場跡を検出した。

第4トレンチ第16層より、下部石列状遺構を検出した。

a 石切鍛冶仕事場跡遺構 (Fig. 7, 8, PL. 2, 4)

仕事場跡の現存規模は、間口3.6m、奥行7.4m (第1平面図)と間口3.6m、奥行2.5m (第2平面図)である。

仕事場内の砂の上に石屑を敷き、床面としている。また、床面を切り込んでフイゴ火つば跡がつくられ、横に金床台が据えられている。

砂岩の切石、40~50cmを積みあげ側壁 (現高約1m)、奥壁 (現高約2m) をつくっている。

1号フイゴ火つば跡 (Fig. 9, PL. 3) は、長さ135cm、幅60cm、深さ40cmで、耐火性の高い板石を2列に並べ溝状にし、板石と板石の間にレンガをはさみ、奥に板石を立て火が他に焼え移るのを防いでいる。火つば内の土層は5層に分かれ、1層から3層までは焼土、炭化物が入り、灰出し口は北西に向いている。

2号フイゴ火つば跡 (Fig. 9, PL. 3, 5) は、長さ125cm、幅60cm、深さ45cmで、耐火性の高い板石を2列に並べ溝にし、一部ふた石を積せ奥には板石を立て、火が他に焼えるのを防いでいる。火つば内の土層は3層に分かれ、1、2層には焼土、炭化物が入り、灰出し口は北西に向いている。

2号火つば跡の東側には、砂岩を荒く打ちかいて作った金床台が据えられている。

灰捨て場跡 (PL. 5) は、東西160cm、南北200cm、高さ40cmで作業場の外にあり、灰の中には、鉄屑、二次的に火熱を受けた陶磁器片、銅銭 (寛永通寶) 等が出土した。

仕事場内の覆土中からは、近世陶磁器片、銅銭、鉄銭、煙管、矢等が出土した。

b 下部石列状遺構 (Fig. 10, PL. 6)

第4トレンチの第16層から、幅1mで東西に延びる砂岩の石列を検出した。

石は、20~30cmでかなり風化しており、一時期は地表面に出ていたものと思われる。石列からは、土器等の遺物は検出できなかったが、一部腐蝕土が確認できた。時期、性格等については不明である。

VIII 遺物

本遺跡35区より出土した遺物は、確認しえた限りでは総て近世以降のものであり、中には最近まで使用されていたものも含まれる。

1 陶磁器類

陶磁器類については(1)表土、(2)遺物包含層、(3)遺構上面、(4)灰捨て場の4項目に整理して述べておく。

(1)表土 (Fig. 16, PL. 14)

①は白磁紅皿である。白色の素地の胴部に蝟磨草の陰刻文をあしらひ、内面は無文のまま青みをおびた釉を施す。外面の一部に釉が流れ付着している。型押し成形である。伊万里系。

②は最近まで使用されていたと思われる磁器碗である。白色の素地に、透明釉を施し、外面に、紺色で城郭図のうつし絵。

(2)遺物包含層 (Fig. 16, 23, PL. 14, 19)

①、②、④-⑥、⑧、⑨、⑩は遺物包含層より出土した遺物である。

このうち、①④⑤⑦は瀬戸系、②⑥⑧⑨は伊万里系の磁器碗である。

①は白色の素地に、わずかに灰色をおびた釉を施し、藍色の呉須で「是」及び「山」と思われる文字を染付。口縁部は少し外反する。瀬戸系。

②は小片であるが碗と思われる。灰白色の素地に灰色の釉を施し、青灰緑色の呉須で胴部に縦縞文の染付。口縁部は少し外反する。伊万里系。

④は白色の素地に、わずかに灰色をおびた釉を施し、藍色の呉須で見込みに「寿」胴部に「赤」の文字を染付。①と同一個体かと思われる。瀬戸系。

⑤は白色に素地に、わずかに青みをおびた釉を施し、藍色の呉須で胴部に秋草文、見込みに「寿」の染付。口縁部は少し外反する。瀬戸系。

⑥は碗の一部と思われる。白色の素地にかすかに青みをおびた釉を施し、濁った藍色の呉須で胴部に線に波文の染付。口辺部はまっすぐちあがる。伊万里系。

⑦は白色の素地に、透明釉を施し、藍色の呉須で胴部に稲束文様の染付。口縁部はわずかに外反する。瀬戸系。

⑧は灰白色の素地に明灰色の釉を施し、くすんだ藍色の呉須で、胴部に秋草文の染付。見込みに不明文様あり。高台畳付に緋色がみられ、砂が付着している。口縁部はわずかに外反する。伊万里系。

⑨は灰白色の素地に、灰色がかった釉を施し、くすんだ藍色の呉須で胴部に縦縞文波文、見込みに井筒文の染付。口縁部はわずかに外反し、高台畳付に砂が付着している。伊万里系。

㊸は小片であるが、七輪かと思われる。素地は土師質で、薄茶色を呈し、小石がまじる。内外面に、ロクロ目がみられ、内面は口辺部直前までクシ目を施し、煤が付着している。

㊹は近世陶器徳利で大谷系である。素地は赤褐色で、外器面近くは黒っぽく発色する。外面には暗褐色の釉を施し、「酒井屋」の彫り字を配す。内外面に明瞭なロクロ目がみられる。

㊺も小片であるが大谷系の徳利と思われる。素地は灰色で、外面に黒褐色の釉を施し、「西」ではないかと思われる彫り字を配す。

(3) 遺構上面 (Fig. 16, PL. 14)

遺構上面より出土したものは、㊻猪口、㊼碗で伊万里系染付である。

㊻は猪口で、灰白色の素地に、灰色がかった釉を施し、くすんだ藍色で胴部に線に波文の文様を染付。高台畳付に緋色がみられる。伊万里系。

㊼は底部付近のみであるが碗と思われる。黄みをおびた灰白色の素地に灰色がかった釉を施し、くすんだ藍色の呉須で、胴部に稲東文様を染付。見込みにも文様がみられるが欠損のため不明である。広東碗と呼ばれるものである。伊万里系。

(4) 灰捨て場内 (Fig. 23, PL. 19)

灰捨て場内より出土した陶磁器類は、㊽の大谷系の陶器のみである。小片であるが徳利である。素地は、中央部が灰色で、内、外器面近くは、より黒っぽく発色する。外面は暗褐色の釉を施し、「塚」の彫り字を配す。内面は無釉で褐色を呈する。

2 石切用具 矢 (Fig. 18, 19, 20, PL. 17)

㊿～㊾は、遺構上面乃至遺物包含層より出土した矢である。矢とは石材を割る鉄製の楔のことで、これを、石材に適当な間隔に掘った矢穴に差し込んで、端から順次に同じ力で玄能で叩いていくと、石が割れる。用途により大小様々な形態がある。㊿全長60mm 幅31mm 厚さ29mm 重量291g ㊽全長55mm 幅34mm 厚さ21mm 重量265g ㊾全長44mm 幅29mm 厚さ21mm 重量115g ㊿全長53mm 幅26mm 厚さ19mm 重量120g ㊾全長42mm 幅28mm 厚さ18mm 重量100g ㊿全長57mm 幅24mm 厚さ16mm 重量105g ㊾全長52mm 幅24mm 厚さ18mm 重量56g ㊿全長26mm 幅11mm 厚さ10mm 重量10g ㊾全長43mm 幅25mm 厚さ22mm 重量70g ㊿全長27mm 幅14mm 厚さ13mm 重量12g

3 鍛冶用具等 (Fig. 21, 22, PL. 18, 20)

石切作業では道具の摩耗が激しく、常に道具の刃先を尖らせて焼きを入れる「鍛冶」をしなければならなかった。石屋は鍛冶が出来なければ一人前といわれなかった所以である。

(1)鉄製品 (Fig. 21, 22, PL. 18, 20)

①～④は石切り場で採集した鍛冶道具である。いずれも鉄製で、石材加工機械が導入されるまで使用されていたと思われる新しいものであるが、遺構上面及び包含層より出土した⑤～⑧、⑩、⑪との関連から参考として述べていく。

⑦、⑧はしを焼いた道具をはさむ金ばさみである。様々な形状があるが、この2点ははさむ部分が丸くなった「丸はし」である。⑧等の棒状のものをはさんだと思われる。⑦全長447mm 重量785g ⑧全長424mm 重量780g ⑨棒状の鉄の中心を縦に切断して、先を開いたもの。中央より先は、平たく加工してあるが、用途は不明である。全長223mm 重量545g ⑩たがね 鉄を切断するのみである。木製の長い柄がつく。全長130mm 刃幅28mm 重量281g

⑫唐鋸 開業用の鋸で、刃は堅牢で重い。出から石材を切り出す時に、岩盤の上に堆積している土砂を取り除くのに使用したのかも知れない。全長291mm 幅73mm 厚さ8mm

⑬、⑭ 矢とともに遺構上面乃至遺物包含層より出土した鉄製品である。製作途中の加工材かと思われる。⑬全長244mm 幅41mm 厚さ14mm 重量625g ⑭全長201mm 幅40mm 厚さ13mm 重量425g

(2)石製品 (Fig. 22)

⑮、⑯金床台 上部の四角い穴に金床（鉄を鍛える地鉄製の台）の下部の突起を差し込んで固定する。⑮は石切り場で採集、⑯は石問いの石として転用されていたものである。⑮現存する最大幅約375mm 最大厚240mm ⑯最大直径約370mm 最大厚約160mm

4 その他の出土遺物 (Fig. 23, 24, PL. 19, 20)

⑰、⑱は丸釘、⑲は鉛釘である。いずれも遺構上面乃至包含層より出土。鉄製。⑰全長約68mm 直径約4.3mm ⑱全長100mm 最大幅約14mm ⑳全長約68mm 直径約45mm

㉑土錘 完成品。土質で色調は薄茶色、胎土は砂粒を含む。手摺により作製される。管状単孔式。遺物包含層より出土。全長60mm 外直径最大20mm 内直径14mm

㉒鉛玉 火縄銃の弾丸である。発射されて変形しており、表面は灰白色に変色している。遺物包含層より出土。直径13mm 重量12g

㉓、㉔銅銭 ㉔の大谷系陶器とともに灰捨て場内より出土した「寛永通寶」である。㉓

は背に「足」の文字のある下野足尾銭座（1742～1746年）鑄造である。㊶直径22.5mm ㊷直径22mm

㊸、㊹行火 表土より出土。㊺に火を起した木炭を入れ（丸くなった方から）㊻の中に（図の開口部より）納めて使用する。㊼の天井部は空間を設けた3枚重ねであると思われるが、外郭のみが残存する。㊽㊾ともに土師質で粘土板成形である。㊿縦131mm 横193mm 高さ78mm 底部厚さ11mm ㊻縦180mm 横227mm 高さ187mm 底部厚さ10mm

IX 大毛島第38区遺跡の地形と現状

(Fig. 1, 11, PL. 7)

第38区遺跡（仮称）は、大毛島を南北に連なる山系が野地区で大きく入り組んで、東に延びる支脈の山裾標高4mから19mにある。傾斜地の形成は、山系の小溪谷の侵蝕作用と堆積作用によるものと思われる。調査区西側の岩に海蝕痕が見え、旧海岸線は複雑に入り組んでいたと思われる。調査区東の山裾には小溪谷からの流水を溜める池状の凹地があり、その南は水田及び畑地となっている。池状の凹地の北側傾斜地には、土塁が連なっている。

X 基本層序 (Fig. 12, 13, PL. 11, 12, 13)

(Aトレンチ)

- 第1層は10YR 5/2 灰黄褐色粘質土層（表土）である。
- 第2層は5YR 5/2 明黄褐色粘質土層で土師器片を包含している。
- 第3層は7.5YR 5/2 にふい褐色砂質土層で土師器片、須恵器片を包含している。
- 第4層は7.5YR 5/2 灰褐色砂質土層で土師器片、炭化物等を包含している。
- 第5層は10YR 5/2 暗褐色粘質土層で炭化物を包含している。
- 第6層は7.5YR 5/2 褐色砂質土層である。
- 第7層は5YR 5/2 赤褐色砂質土層で砂岩礫を含んでいる。
- 第8層は5YR 5/2 にふい赤褐色砂質土層で砂岩崩壊石、炭化物を包含している。
- 第9層は7.5YR 5/2 明褐色砂質土層で砂岩礫、弥生土器片を包含している。
- 第10層は10YR 5/2 にふい黄褐色砂質土層で炭化を含んでいる。
- 第11層は10YR 5/2 褐色砂質土層で炭化物を含んでいる。
- 第12層は2.5GY 4/2 暗オリーブ灰色砂質土層で自然木、炭化物を多量に含んでいる。

- 第13層は7.5YR $\frac{4}{2}$ 黒色粘質土層で炭化物、灰を多量に含んでいる。
 第14層は砂礫層で弥生土器片、自然木、炭化物、崩壊石を包含している。
 第15層は10GY $\frac{4}{2}$ 緑灰色砂層で、弥生土器片、炭化物等を含んでいる。
 第16層は10GY $\frac{4}{2}$ 暗緑灰色砂層で炭化物等を含んでいる。
 第17層は砂礫層で自然木を含んでいる。
 第18層は10GY $\frac{4}{2}$ 暗緑灰色砂層で炭化物を含んでいる。

(Bトレンチ)

- 第1層は5YR $\frac{3}{2}$ 暗赤褐色腐葉土層(表土)である。近世陶磁器片を包含している。
 第2層は7.5YR $\frac{4}{2}$ 褐色砂質土層で、砂岩の崩壊土を含んでいる。
 第3層は10YR $\frac{4}{2}$ 灰黄褐色粘質土層で、土師器片、炭化物等を含んでいる。
 第4層は10YR $\frac{4}{2}$ 褐灰色粘質土層で、崩壊土を含んでいる。
 第5層は10YR $\frac{4}{2}$ 暗褐色砂質土層で、崩壊石を含んでいる。
 第6層は5YR $\frac{4}{2}$ におい赤褐色砂質土層で土師器片、炭化物等を含んでいる。
 第7層は7.5YR $\frac{4}{2}$ におい褐色砂質土層で、崩壊石を含んでいる。
 第8層は5YR $\frac{4}{2}$ におい赤褐色砂質土層で、崩壊土を含んでいる。
 第9層は7.5GY $\frac{4}{2}$ 緑色粘質質砂性土層で、砂岩礫、弥生土器片等が混在して入っている。

灰色粘

- 第10層は10YR $\frac{4}{2}$ におい黄褐色砂質土層で、炭化物を含んでいる。
 第11層はGY $\frac{4}{2}$ 緑灰色砂層で、弥生土器片、木材、炭化物、崩壊石を含んでいる。
 第12層は砂礫層で、弥生土器片、砂岩の巨礫を含んでいる。この下層は岩盤となっている。

以上からわかるように、小溪谷による侵蝕、堆積作用がくり返されていて、安定した状態での遺構の検出はむずかしく遺物は流入してきたものと思われる。

(Cトレンチ)

- 第1層は5YR 暗赤褐色腐葉土層(表土)である。
 第2層は10YR $\frac{4}{2}$ 褐色砂質土層で近世陶磁器片を包含している。
 第3層は10YR $\frac{4}{2}$ におい黄褐色砂質土層で砂岩崩壊土を含んでいる。
 第4層は5YR $\frac{3}{2}$ 黒褐色砂質土層で腐葉土、砂岩焼石が混入している。

- 第5層は2.5Y R 黄褐色砂層である。
第6層は10Y R 黄褐色砂質土層である。
第7層は10Y R 黄褐色砂質土層で崩壊石混りである。
第8層は礫層で砂岩崩壊石が堆積している。
第9層は10Y R 黄褐色砂質土層で崩壊土混りである。

(Dトレンチ)

- 第1層は5 Y R 灰褐色砂質土(表土)である。
第2層は7.5Y R 褐色砂質土層で崩壊石混りである。近世陶磁器を包含している。
第3層は10Y R 黄褐色砂質土層である。
第4層は10Y R 褐色砂質土層で炭化物混りである。
第5層は礫層で砂岩礫の堆積層である。
第6層は2.5Y R 暗オリーブ褐色砂層で炭化物混りである。
第7層は10Y R 黄褐色砂層で無遺物層である。

XI 遺 構

土壘状遺構 (Fig. 11, 14, 15, PL. 8, 9, 10)

大毛山系の山裾、標高14mに位置し、規模は幅1m、高さ1.5m、長さ100m以上で、傾斜面を幅2m程切りくずし、10~80cm大の砂岩切石を3段から5段石垣状に積んでいる。

土壘の断面は、台形状を呈し、両端に80cm大の切石を据え、間に小切石と土をつめた構造である。上部は、石の風化がはげしく原形をとどめない状態である。一部に石ノミの痕が残った切石が出土している。

土壘の山裾側は、幅1m程の山道となっている。

XII 遺 物

38区出土遺物は、鉄錘及び弥生土器、土師器、灰釉陶器、そして近世~現代に亘る陶磁器片である。

本区については、(1)表土と(2)遺物包含層に分類して述べることにする。なお、本区では

遺構からの出土遺物はない。

(1)表土 (Fig. 17, PL. 15)

表土出土の遺物は、近現代陶磁器類である。

⑬、⑭は染付の碗と思われる。

⑬は、内外面に藍色で、秋草文を配している。白色の素地に、青みをおびた釉を施す。口縁部が少し外反する。伊万里系。

⑭は、胴部に濁った藍色の呉須で、松竹梅文を施し、内面口縁部に梅に波文を配している。全体に気泡を含む。伊万里系。

⑮は絵付磁器の山蓋でつまみを持たないものである。外面に笹に流水文、内面に白色の細かい渦巻を施している。

⑯は銅版摺の碗で、⑰は同じく鉢である。

⑱は、百人一首カルタ図で、発色が極めて悪い。銅版摺。

⑲は、胴部に巻物図、内面口縁部に唐草文を配している。銅版摺。

⑳は現代磁器と思われる。

㉑、㉒、㉓は陶器で、㉔㉕は皿である。

㉖は、明るい灰色の素地に、明灰白色の釉を施し、高台及び外面底部は無釉。内外面に薄い藍色の呉須で渦巻き文を配し、口縁を施している。

㉗は、黄土がかかった白色の素地に、黒みをおびた黄褐色の釉を施している。底部は無釉。細かい貫入がみられる。内部及び底部に砂が付着している。

㉘は、大谷系であるが、小片のため器種は不明である。赤みをおびた茶色の素地に、わずかに緑がかかった褐色の釉を施す。外面底部及び内面は無釉。内面は赤褐色を呈す。

(2)遺物包含層 (Fig. 17, 23, PL. 15, 16)

包含層出土の遺物は、近世磁器、灰釉陶器、土師器、弥生土器及び鉄錘である。

㉙は、染付磁器の徳利と思われる。灰白色の素地に、青灰色をおびた釉を施し、くすんだ藍色の呉須で、胴部と高台部に横施文を配している。内面は無釉。伊万里系。

㉚は灰釉陶器であるが、小片のため器種は不明である。雲母と小砂粒を含む、灰白色の素地に胴部及び高台に灰釉を施す。高台端部にも灰釉が付着している。高台は貼り付けで、外方向に張り出し、端部は内傾する。紐土巻き上げ成形か。

㉛～㉞は土師器の坏、皿と思われる。完成品はなく、状態も良くないので、詳細はわからない。簡単にふれるにとどめる。

㉞は坏と思われる。紐土巻き上げ成形で、底部は篋切り、内底面は指押え調整である。胎土は水漉しを行ない、精選されている。

㉟、㊱、㊲、㊳、㊴、㊵、㊶は皿と思われる。

㉟、㊱、㊲は平短な底部を持つ。

㊳、㊴は体部外面に強いヨコナデ調整を施す。

㊵、㊶は、体部下半は内湾し、上半がわずかに外反する弧を描く。口縁部は巻き込む。

㊷は不明、㊸、㊹は弥生土器である。

㊸は、口辺部及び頸部の小片で、器種は不明である。口辺部は、緩く外湾するカーブを描いて立ち上がり、口縁端は下向きに拡張し、丸まる。口縁上端に一条の凹線をめぐらせる。外面はナデ調整。

㊹は底部の一部である。突出する平底で、外面はハケで調整した後、ヘラで磨いている。外底面はナデ調整で、底部内面に粘土を練ぎ足し、強く指押え調整した後に、ナデ調整している。胎土は粗く、石英、雲母を含む小石混じりである。

㊺も底部の一部であるが、器種は不明である。底径38mmと小さく、外面にハケ目がみられる。底部は押し上げている。

なお、排土中から、㊺の鉄鏝が出土している。鑄鉄製で、内外面に錆止めを施している。管状単孔式。半身欠落。全長47mm。

VIII まとめ

大毛島遺跡は、これまでに旧石器時代から江戸時代にわたる各種の遺構、遺物が検出されており、大毛島地域での各時代の集落の存在を知る手がかりとなるものである。本章では、今回調査の包含層出土遺物、石切鍛冶仕事場跡遺構(第35調査区)、土壘状遺構(第38調査区)について述べてまとめとしたい。

1 包含層出土遺物について

弥生時代から古墳時代の遺物としては、弥生土器、土師器、石器類が少量見られた。周辺地域での遺跡の分布は少なく、大毛島山系等の山裾からの出土に限られており、集落及び古墳形成等の実態を示す資料までは至っていない。今後は、周辺地域の他の島々との関係についても検討していく必要があろう。

奈良時代から平安時代にかけての資料は、少量みられた。土佐泊浦は、紀貫之の「土佐日記」に誌されており、平安時代初期に人々が土佐泊港近くに住んでいたことが知られている。今回の調査で大毛山系の山裾から土師器皿等が出土したことにより生活地の広がりが考えられる。

中世の遺物についてもわずかであるが見られた。

近世の遺物については、比較的多くの資料が得られた。近世陶器(大谷系)、近世磁器(瀬戸系、伊万里系)を主とする日常雑器類であり、近世陶磁器の流通、生産地と消費地の関係を検討する手がかりとなると思われる。

2 石切鍛冶仕事場跡遺構について(第35区)

石切鍛冶仕事場跡からは、近世陶磁器(碗、猪口、土瓶、徳利等)、銅銭(寛永通寶)、鉄製品(矢、ノミ等)が出土している。

近世磁器は、染付の高台碗(広東碗)、口縁部を少し外反させた日常雑器碗等伊万里系が主である。⁽¹⁾

近世陶器は、仕事場内及び灰捨て場跡から「酒井屋」、「塩」、「西」等とへら様の道具で陰刻された徳利が出土している。⁽²⁾

銅銭は、灰捨て場跡から寛永通寶、背に「足」字のものが出土している。下野足尾銭座⁽³⁾鑄造のものと思われる。

次に、撫養石の石切り場について述べる。撫養石は、阿讃山脈東端の撫養地方の山々から切り出され、建築用材、塩田堤防用材、石碑材等に古くから利用されてきている。

宝暦(1751~1763)頃までは、高島村に限られており、後には所々に石切り場ができた⁽⁴⁾様である。また、天保5年(1835)頃には落當とされ、天保9年(1839)頃には販売に対する保護政策がとられている。

以上、出土遺物、文献等から考えると石切鍛冶仕事場跡遺構が使用されたのは、江戸時代後期以降であると思われる。

また、大毛島周辺には、石切り場は数多くあるがその歴史についてはまだ十分にはわかっていない。今回調査した第35区周辺の山は、鍛冶仕事場跡が使用されていた時期に石切り場として使用されていたものと思われる。

3 土塁状遺構について(第38区)

大毛島南部の野地区の山裾に築かれたものである。西條氏と大毛牧場、近世田島開発等との関係から述べてみたい。

寛永6年(1629)に15疋の馬を大毛島に放牧したのが最初で、明治2年(1869)大毛牧場廃止まで続いた。また、寛政7年(1795)に西條真太郎重明が大毛牧馬制道人に仰せ付けられてから代々西條家が管理に当たった。放牧区域は、黒山境より大毛嶋門戸崎の間と思われ、島の所々に石垣を築いており、馬が家へ突入してくるのを防ぐ為のものと思われる。

土佐泊浦地区の田島開発に関する資料は文献には次のように記載されている。

大永3年(1523)大代勝福寺過去帳に「泊庄」の荘園名が見える。

①延宝6年(1678)5月13日、板野郡土佐泊浦新開御検地帳、田2町2反5畝18歩、高19石4斗2升2合、田畠合15町4反2畝9歩、高合85石6斗6升8合 ②元禄8年(1675)12月18日、板野郡土佐泊浦新開御検地帳、畠6反4畝24歩、高1石5斗1升4合 ③宝永5年(1708)11月、板野郡土佐泊浦新開御検地帳、田8畝15歩、高6斗5升7合、畠3反1畝、高1反6斗1升7合、田畠合3反9畝15歩、高合1石1斗7升4合 ④正徳元年(1711)11月、板野郡土佐泊浦新開御検地帳、田8反3畝13歩、高2石5斗2合、畠1町1反5畝3歩、高1石5斗6升9合、田畠合1町9反8畝15歩、高合4石7升1合 ⑤享保6年(1721)3月、板野郡土佐泊浦新開御検地帳、田8反3畝13歩、高2石5斗2合、畠1町1反5畝3歩、高1石5斗6升9合、田畠合1町9反8畝15歩、高合4石7升1合 ⑥享保18年(1733)11月、板野郡土佐泊浦新開御検地帳、田2反7畝24歩、高1石1斗1升2合、畠5反3畝12歩、高6斗7升8合、田畠8反3畝6歩、高合1石7斗9升 ⑦宝暦4年(1755)3月、板野郡土佐泊浦新開御検地帳、畠7反4畝3歩、高7斗4升5合 ⑧天明3年(1783)11月、板野郡土佐泊浦御検地帳、畠4反5畝24歩、高9斗1升6合

以上は、土佐泊浦地区の記録であるが、具体的な水田址としては、第39区の水田址がある。第39区遺跡の水田址は、出土遺物等から江戸時代の後半、宝永5年(1708)、享保6年(1721)、享保18年(1733)のいずれかに該当するものと考えられる。

土塁状遺構を馬・鹿等が田畠へ侵入するのを防ぐ為に構築されたものと考えられるならば、築造時期は水田址と同時期頃であると考えられる。

以上の点からみて、石切鍛冶仕事場跡(第35区)、土塁状遺構(第38区)は大毛島地区における江戸時代後半の貴重な遺構であったことが窺える。

(註)

- (1) 『肥前陶磁編年図表』のⅣ期1780年代～1860年代(天明～慶応)に相当するものと思われる。『北海道から沖縄まで 国内出土の肥前陶磁器』佐賀県立九州陶磁文化館 1984
- (2) 『板野郡撫養近在には寛政7年(1795)のころに次の造酒屋があった。』

土佐泊浦	造酒屋	惣軒	塩屋	茂吉
高島村	造酒屋		酒井屋	九郎左衛門
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮

『鳴門市史』上巻 1976

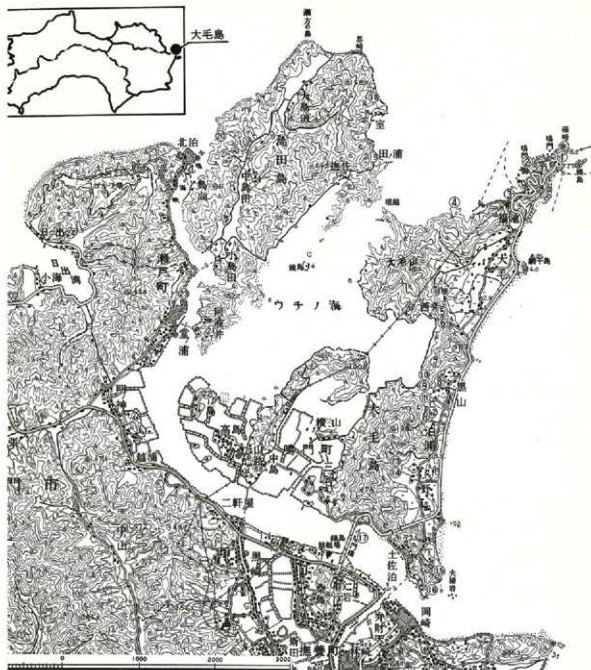
- (3) 寛保下野足尾所鑄造のものは、裏面に鑄造地足尾を表わす「足」字がある。これには大字、小字の別があり、銭形にも大中小がある。1742年～1746年に鑄造されたものと思われる。
『日本貨幣図鑑』 郡司勇夫編 東洋経済新報社 1961
- (4) 「一 石取り場 此石取場塩浜普請手当ニ被下置候石口ニ而往古々今ニ不尽先年より此所江泉州葛造り村より石工罷越シ渡世仕近年ハ黒崎南浜其外所々ニ石工多シ宝曆年中迄ハ此処に限る」『戸辺集』『鳴門市史』上巻
- (5) 『板野郡誌』 放牧
『鳴門市史』 7 林業・牧畜・鉱工業
- (6) 『鳴門市史』 1. 藩政の成立
『鳴門市史』 4. 農業の「文化12年(1815)村浦別農地面積・実収高表」に土佐泊浦、畑32町4反4畝24歩、田5町2反8畝6歩、計37町7反3畝、実収高210石(阿波志による)と表わされている。
- (7) 『徳島県教育委員会調査概報』 1980 VIまとめ 水田址

文 献

- ・ 鳴門市史編纂委員会編 1976『鳴門市史』上巻・中巻
- ・ 1972『板野郡誌』(上・下巻) 名著出版
- ・ 藩法研究会 1962『藩法集3』徳島藩 創文社
- ・ 徳島県教育委員会文化課編 1980『徳島県文化財調査概報』
- ・ 徳島県教育委員会文化課編 1981『徳島県文化財調査概報』
- ・ 徳島県教育委員会 1981『中内遺跡—県道バイパス鳴門・池田線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報—』
- ・ 文化庁文化財保護部 1980『全国遺跡地図』徳島県
- ・ 成安女子短期大学校地学術調査委員会 1977『相国寺旧寺域内の発掘調査—成安女子学園校地内の埋蔵文化財—』

- ・ 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室編 1984『砥石山遺跡—北九州市小倉南区下城野所在—』北九州市埋蔵文化財調査報告書第28集
- ・ 佐賀県立九州陶磁文化館 1984『北海道から沖縄まで 国内出土の肥前陶磁器』
- ・ 1981『世界陶磁全集』(8) 小学館
- ・ 豊田誠庵 1969『阿波の焼物 大谷焼』日本陶磁協会徳島支部
- ・ 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1983『国東半島の石工1』報告書第1集
- ・ 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1984『国東半島の石工2』報告書第2集
- ・ 矢部倉吉 1973『古銭と紙幣 収集と鑑賞』金園社
- ・ 郡司勇夫編 1981『日本貨幣図鑑』東洋経済新報社
- ・ 宮本馨太郎編 1979『図録・民具の基礎知識』柏書房
- ・ 高橋正則 野々村拓也 1983『旧石器考古学』26 旧石器文化談話会
- ・ 色彩企画センター編 『配色色名帖』日本色彩社
- ・ 小山正忠・竹原秀雄編 1967『新版標準土色帖』

插 圖



鳴門公園千畳敷下遺跡 2. 北山古墳 3. 大毛島6区遺跡 4. 納言山古墳 5. 大毛島21区遺跡 6. 大毛島22・23区遺跡 7. 大毛島27区遺跡 8. 大毛島29区遺跡 9. 大毛島30区遺跡 10. 大毛島31区遺跡
 大毛島33区遺跡 12. 大毛島35区遺跡 13. 大毛島38区遺跡 14. 大毛島39区遺跡 15. 土佐泊廃寺(仮称)
 松瀬崎古墳 17. 小鳴門海峡海底遺跡 18. 室古墳群 19. 田ノ浦古墳群 20. 島向古墳 21. 阿波井神社
 22. 竹島古墳 23. 堂浦天神社古墳群 24. 日出古墳群 25. 日出遺跡 1:50,000 鳴門海峡

国土地理院発行

Fig 1. 大毛島第33・35・38区遺跡と周辺の遺跡

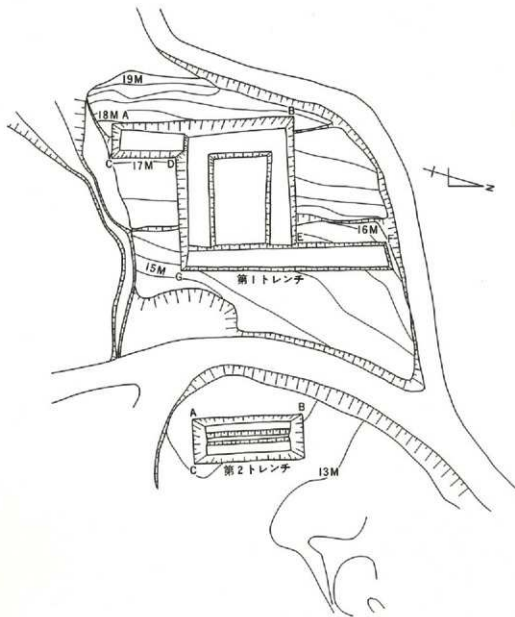
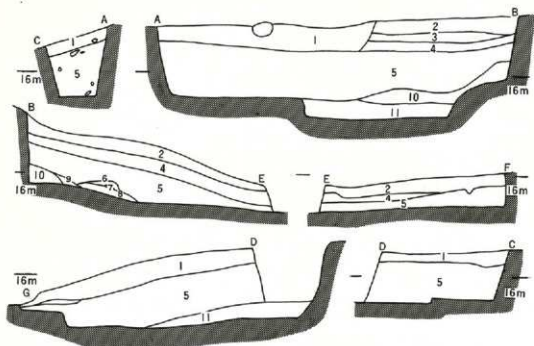
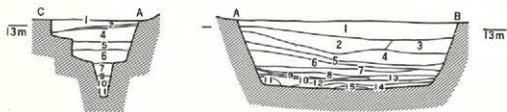


Fig. 2. 第33区地形測量図・トレンチ配置図



第1トレンチ

- | | |
|-----------------------|------------------------|
| 1 10Y R 5/6 褐色砂質土 | 6 10Y R 5/6 黄褐色砂質粘性土 |
| 2 10Y R 5/6 にふい黄橙色砂質土 | 7 10Y R 5/6 黄褐色砂質土 |
| 3 10Y R 5/6 明黄褐色砂質土 | 8 10Y R 5/6 明黄褐色砂質土 |
| 4 10Y R 5/6 にふい黄褐色砂質土 | 9 10Y R 5/6 にふい黄橙色砂質土 |
| 5 10Y R 5/6 褐色砂質土 | 10 10Y R 5/6 明黄褐色砂質粘性土 |
| | 11 10Y R 5/6 明黄褐色砂質土 |



第2トレンチ

- | | |
|-----------------------|------------------------|
| 1 2.5Y 5/6 黒褐色砂質 | 9 5Y 5/6 灰オリブ砂土 |
| 2 2.5Y 5/6 オリブ褐色砂質粘性土 | 10 5Y 5/6 灰色砂土 |
| 3 2.5Y 5/6 オリブ褐色砂質粘性土 | 11 2.5Y 5/6 オリブ褐色砂質粘性土 |
| 4 2.5Y 5/6 暗オリブ褐色砂質土 | 12 10B G 5/6 暗青灰砂質土 |
| 5 2.5Y 5/6 黄灰粘質土 | 13 2.5Y 5/6 黄褐色粘性土 |
| 6 2.5Y 5/6 黄褐色砂土 | 14 5B 5/6 暗青灰色粘性土 |
| 7 7.5Y 5/6 灰色砂質粘性土 | 15 10Y R 5/6 にふい黄褐色粘性土 |
| 8 10Y R 5/6 褐色粘性土 | |



Fig. 3. 第33区第1・2トレンチ土層図

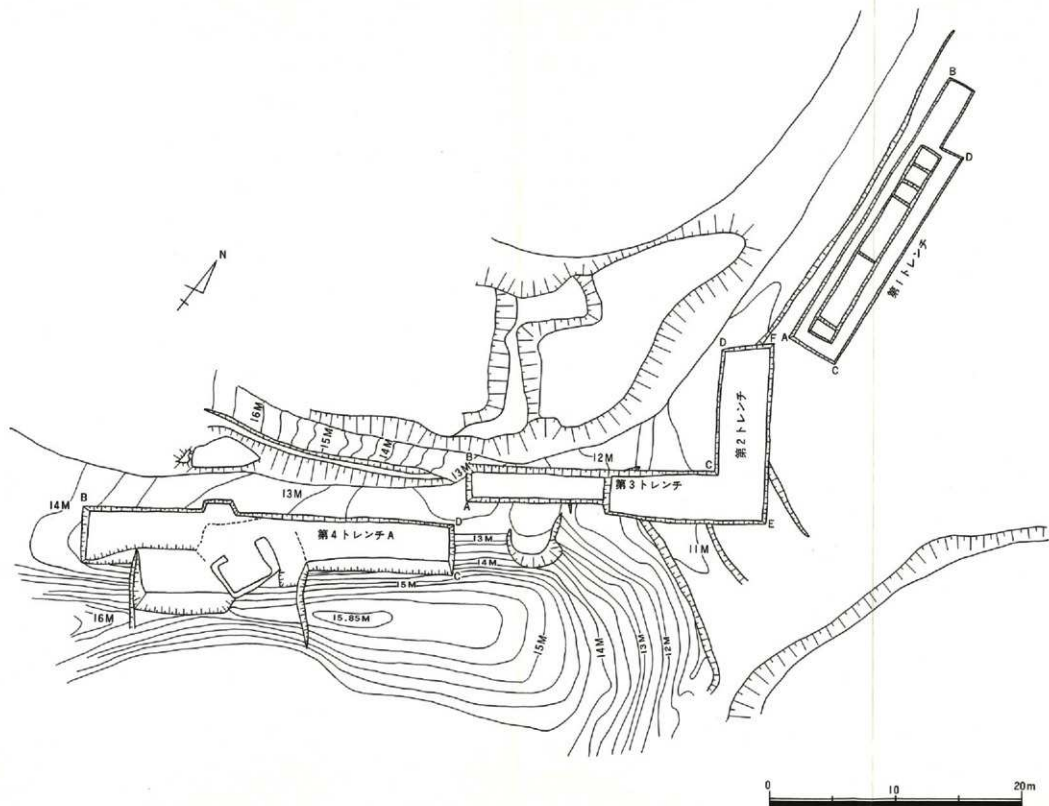
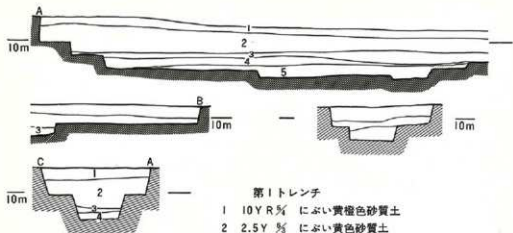
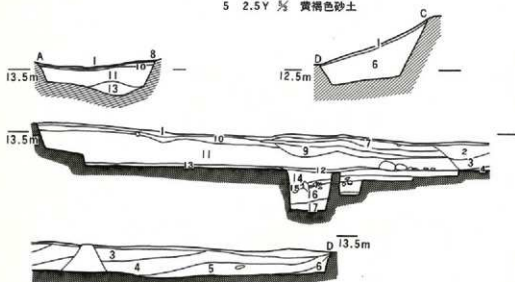


Fig. 4. 第35区地形測量図・トレンチ配置図



第1トレンチ

- 1 10Y R $\frac{3}{6}$ にぶい黄橙色砂質土
- 2 2.5Y $\frac{3}{6}$ にぶい黄色砂質土
- 3 10Y R $\frac{3}{6}$ にぶい黄橙色砂土
- 4 10Y R $\frac{3}{6}$ にぶい黄褐色砂土
- 5 2.5Y $\frac{3}{6}$ 黄褐色砂土



第4トレンチ

- | | |
|--|--|
| 1 10Y R $\frac{3}{6}$ 黒褐色腐蝕土 | 9 10Y R $\frac{3}{6}$ にぶい黄褐色砂質土
(5-10cmの角礫含む) |
| 2 10Y R $\frac{3}{6}$ にぶい黄橙色砂質土 | 10 10Y R $\frac{3}{6}$ にぶい黄褐色砂質土
(10-20cmの角礫含む) |
| 3 10Y R $\frac{3}{6}$ にぶい黄橙色砂質土
(20-30cmの角礫含む) | 11 2.7Y $\frac{3}{6}$ 浅黄褐色砂質土
(5-20cmの角礫含む) |
| 4 10Y R $\frac{3}{6}$ 明黄褐色砂質土
(10-20cmの角礫含む) | 12 10Y R $\frac{3}{6}$ 褐灰色砂土 |
| 5 10Y R $\frac{3}{6}$ にぶい黄褐色砂質土
(1-2cmの砂粒崩壊石含む) | 13 2.5Y $\frac{3}{6}$ オリーブ褐色砂土 |
| 6 2.5Y $\frac{3}{6}$ 黄褐色砂土 | 14 10Y R $\frac{3}{6}$ 褐灰色砂土 |
| 7 10Y R $\frac{3}{6}$ にぶい黄橙色砂質土
(5-20cmの角礫含む) | 15 10Y R $\frac{3}{6}$ にぶい黄褐色砂土 |
| 8 10Y R $\frac{3}{6}$ 明黄褐色砂質土
(1-2cmの砂粒崩壊石含む) | 16 10Y R $\frac{3}{6}$ 黒褐色砂土
(炭化物を含む) |
| | 17 10Y R $\frac{3}{6}$ にぶい黄褐色砂土 |



Fig. 5. 第35区第1, 4トレンチ土層図

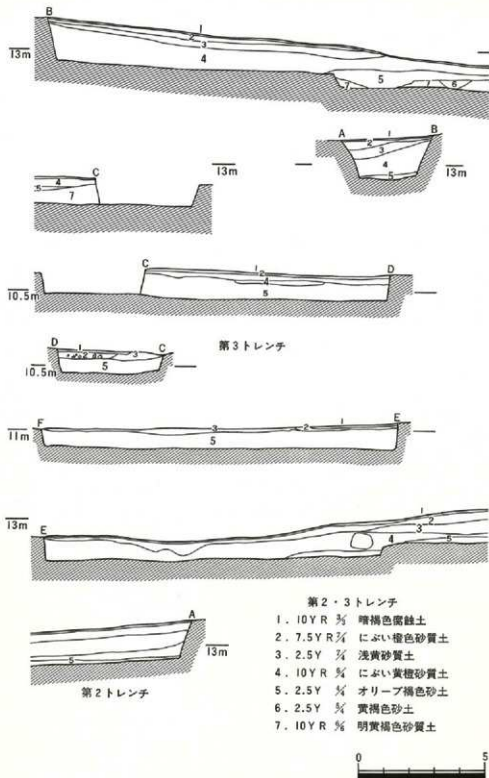


Fig. 6. 第35区第2・3トレンチ土層図

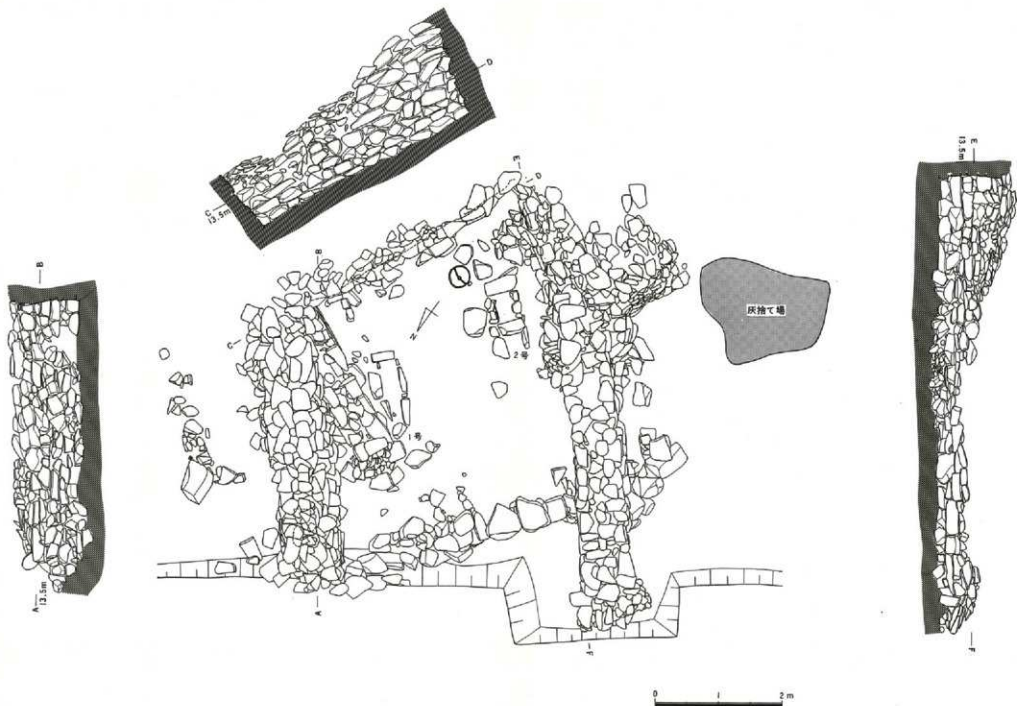


Fig. 7. 第35区石切鍛冶仕事場跡遺構 第1図

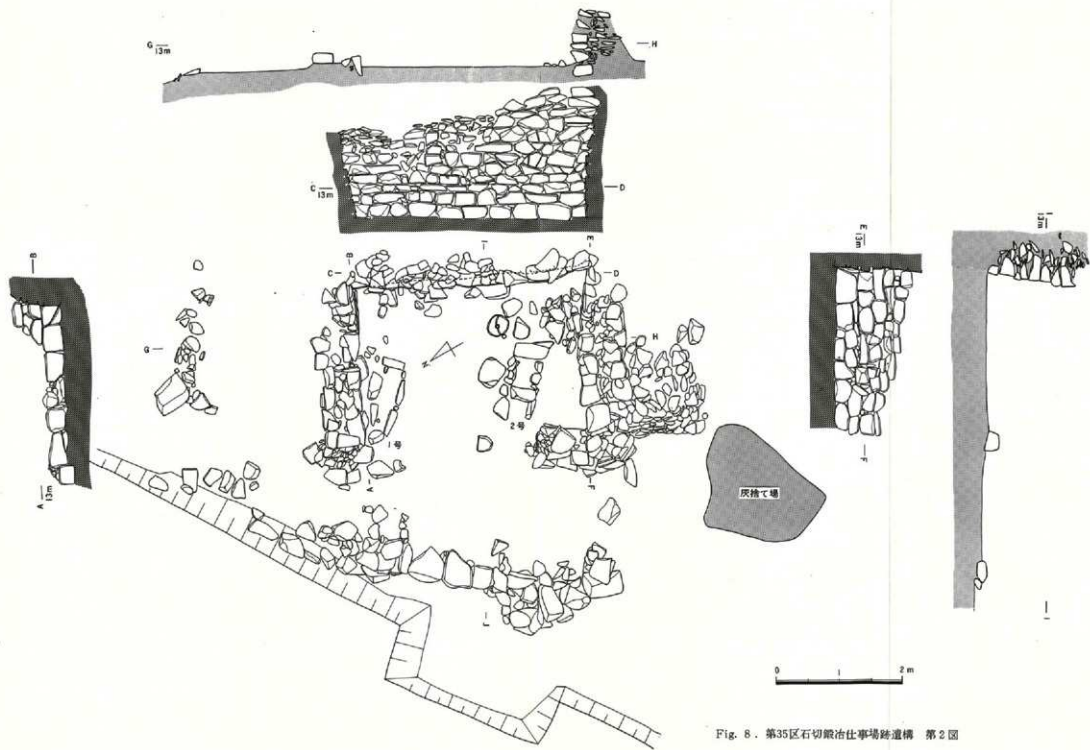
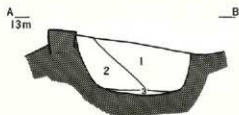
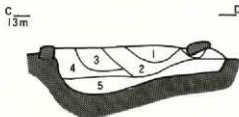


Fig. 8. 第35区石切鍛冶仕事場跡遺構 第2図



- 1. 7.5Y R 1/2 暗褐色砂質土層
- 2. 5Y R 1/2 赤褐色砂質土層
- 3. 10Y 1/2 オリーブ灰色砂層



- 1. 7.5Y R 1/2 褐色砂質土層
- 2. 10Y R 1/2 暗褐色砂質土層
- 3. 7.5Y R 1/2 暗褐色砂質土層
- 4. 7.5Y R 1/2 褐色砂質土層
- 5. 10Y 1/2 オリーブ灰色砂層



Fig. 9. 第35区フィゴ地跡実測図

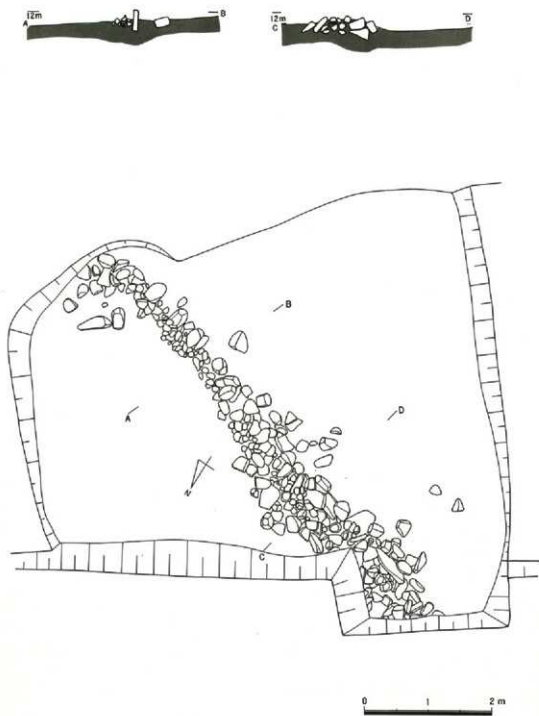


Fig. 10. 第35区下部石列状遗物横切面图

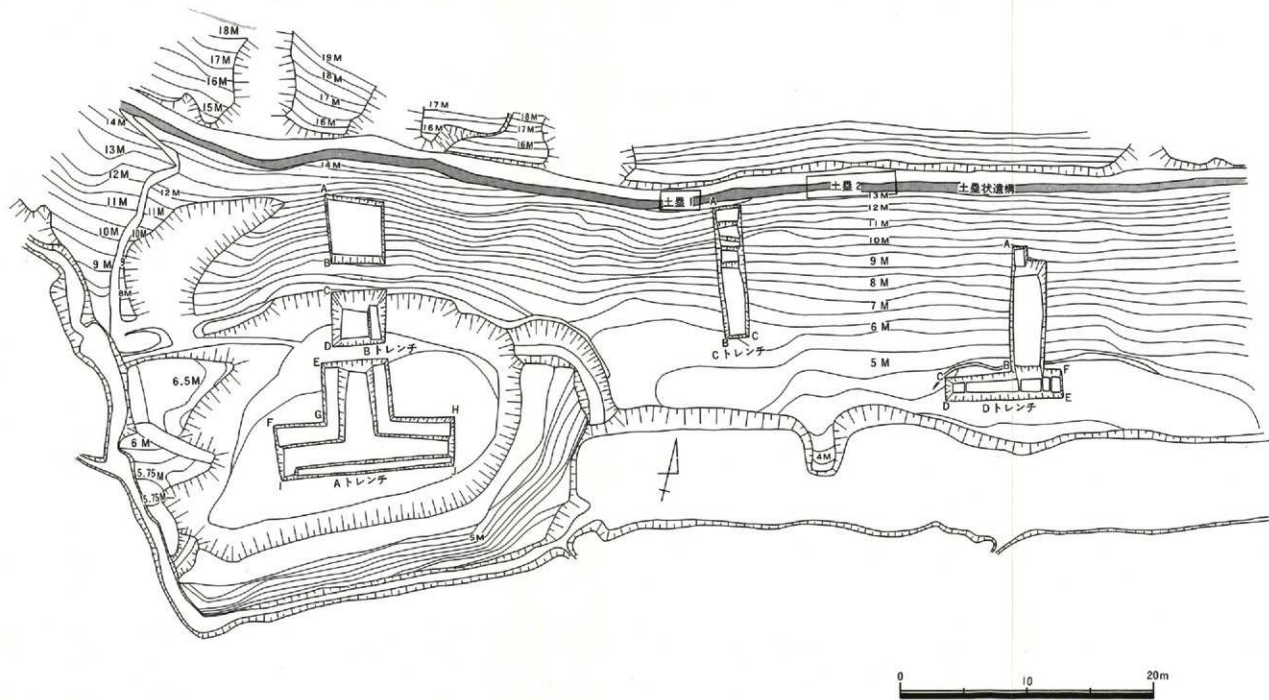
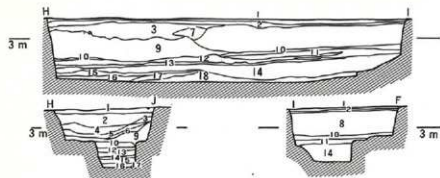
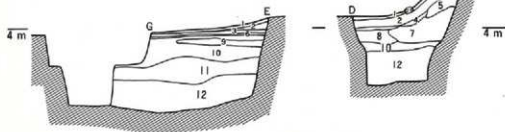


Fig. 11. 第38区地形測量図・トレンチ配置図



A トレンチ

- | | |
|-----------------------|-------------------------|
| 1. 10YR 5/2 灰黄褐色粘質土 | 10. 10YR 5/2 にぶい黄褐色砂質土 |
| 2. 5YR 5/2 明黄褐色砂質土 | 11. 10YR 5/2 褐色砂質土 |
| 3. 7.5YR 5/2 にぶい褐色砂質土 | 12. 2.5GY 5/2 オリーブ灰色砂質土 |
| 4. 7.5YR 5/2 灰褐色砂質土 | 13. 7.5YR 5/2 黒色粘質土 |
| 5. 10YR 5/2 暗褐色粘質土 | 14. 砂礫層 |
| 6. 7.5YR 5/2 褐色砂質土 | 15. 10GY 5/2 緑灰色砂土 |
| 7. 5YR 5/2 赤褐色砂質土 | 16. 10GY 5/2 暗緑灰色砂土 |
| 8. 5YR 5/2 にぶい赤褐色砂質土 | 17. 砂礫層 |
| 9. 7.5YR 5/2 明褐色砂質土 | 18. 10GY 5/2 暗緑灰色砂土 |



B トレンチ

- | |
|------------------------|
| 1. 5YR 5/2 暗赤褐色腐蝕土 |
| 2. 7.5YR 5/2 褐色砂質土 |
| 3. 10YR 5/2 灰黄褐色粘質土 |
| 4. 10YR 5/2 褐色粘質土 |
| 5. 10YR 5/2 暗褐色砂質土 |
| 6. 5YR 5/2 にぶい赤褐色砂質土 |
| 7. 7.5YR 5/2 にぶい褐色砂質土 |
| 8. 5YR 5/2 にぶい赤褐色砂質土 |
| 9. 7.5GY 5/2 緑灰色粘質砂性土 |
| 10. 10YR 5/2 にぶい黄褐色砂質土 |
| 11. 10GY 5/2 緑灰色砂土 |
| 12. 砂礫層 |

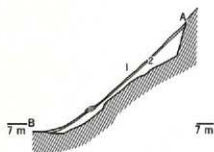
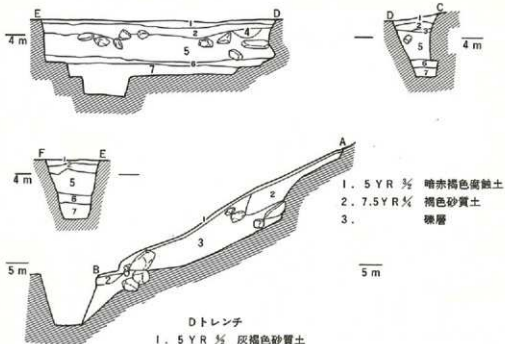
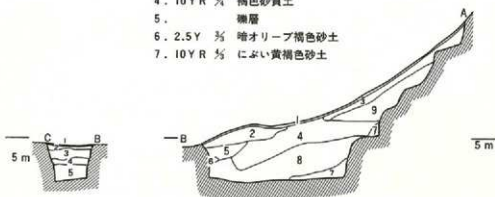


Fig. 12. 第38区A・Bトレンチ土層図



Dトレンチ

1. 5 YR 5/2 灰褐色砂質土
2. 7.5 YR 5/2 褐色砂質土
3. 10 YR 5/2 によい黄褐色砂質土
4. 10 YR 5/2 褐色砂質土
5. 礫層
6. 2.5 Y 5/2 暗オリーブ褐色砂土
7. 10 YR 5/2 によい黄褐色砂土



Cトレンチ

1. 5 YR 暗赤褐色腐蝕土
2. 10 YR 5/2 褐色砂質土
3. 10 YR 5/2 によい黄褐色砂質土
4. 5 YR 5/2 黒褐色砂質土
5. 2.5 Y 5/2 黄褐色砂土
6. 10 YR 5/2 によい黄褐色砂質土
7. 10 YR 5/2 によい黄褐色砂質土
8. 礫層
9. 10 YR 5/2 によい黄褐色砂質土



Fig. 13. 第38区C・Dトレンチ土層図

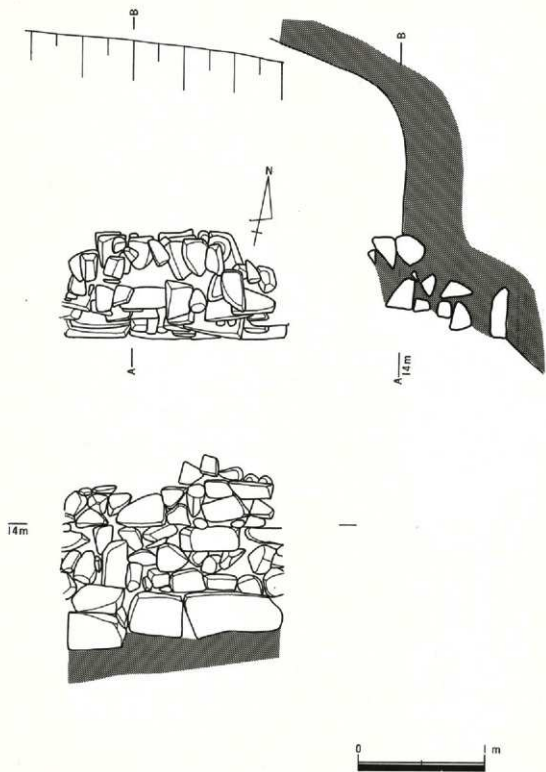


Fig. 14. 第38区土型状遺構実測図 (1)

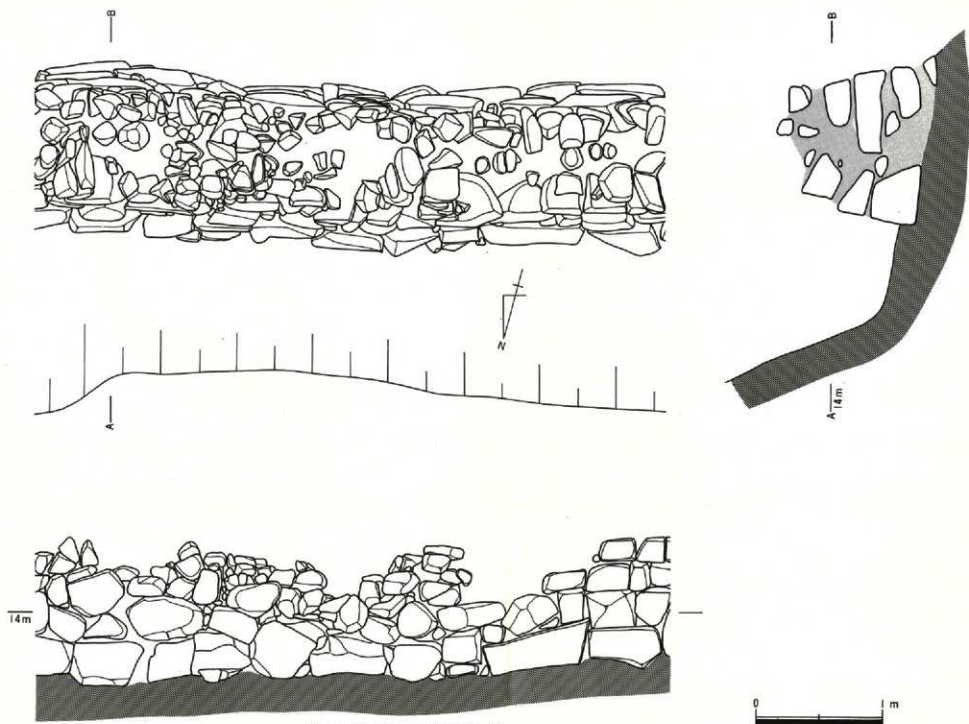


Fig. 15. 第38区土质状道横断面图 (2)

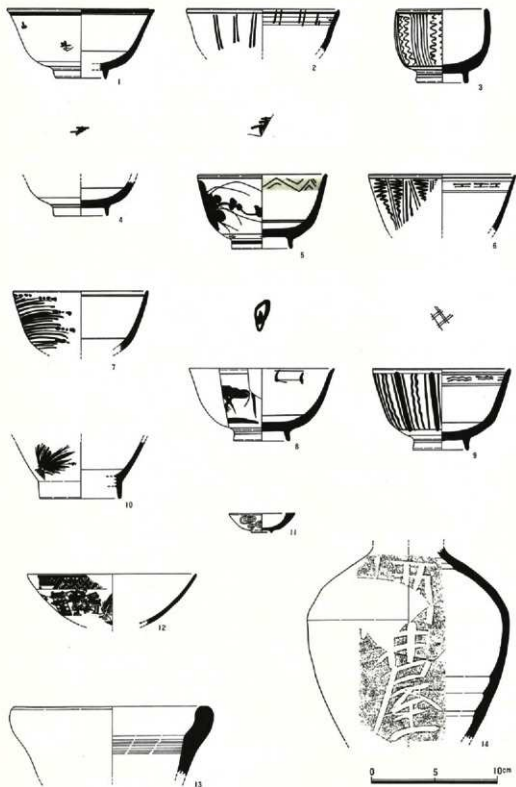


Fig. 16. 第35区出土 陶磁器

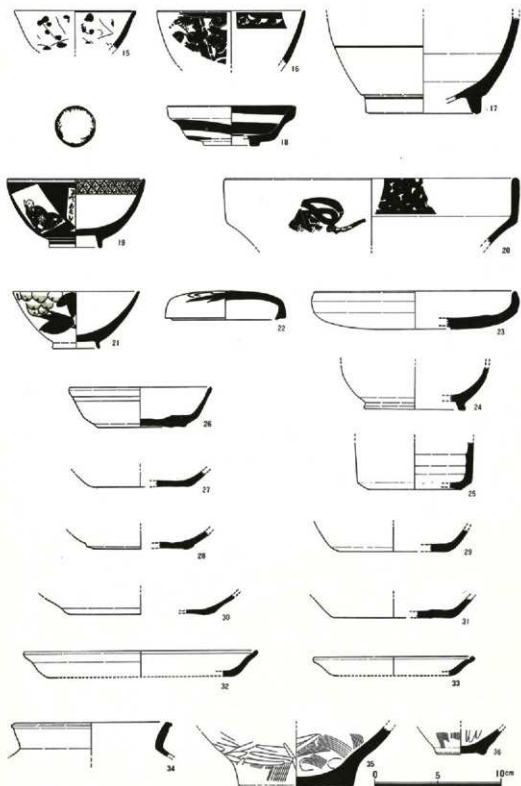


Fig. 17. 第38区出土 陶磁器・土師器・弥生土器

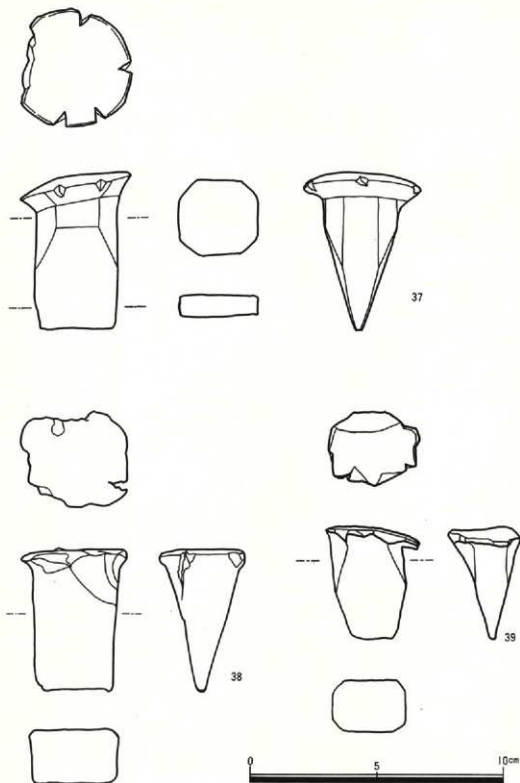


Fig. 18. 第35区出土石切用具 矢(1)

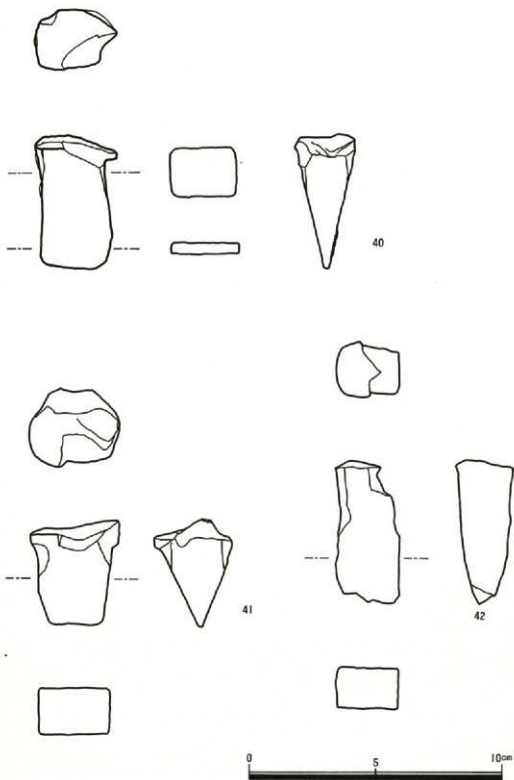


Fig. 19. 第35区出土石切用具 矢(2)

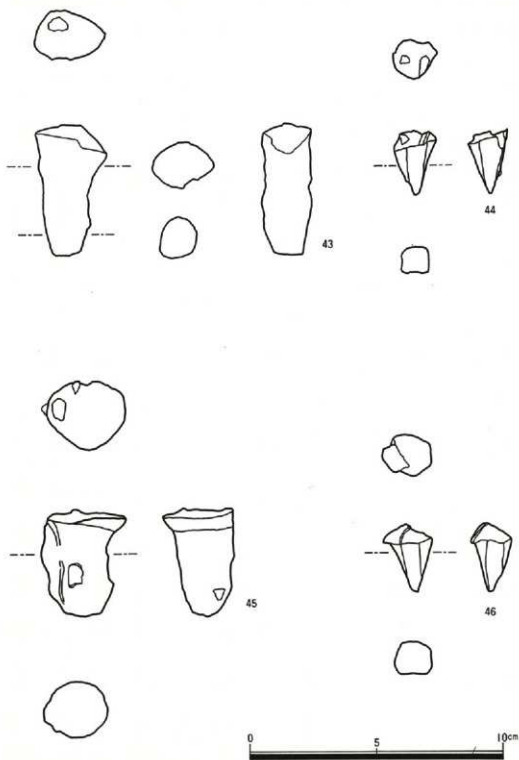


Fig. 20. 第35区出土石切用具 矢(3)

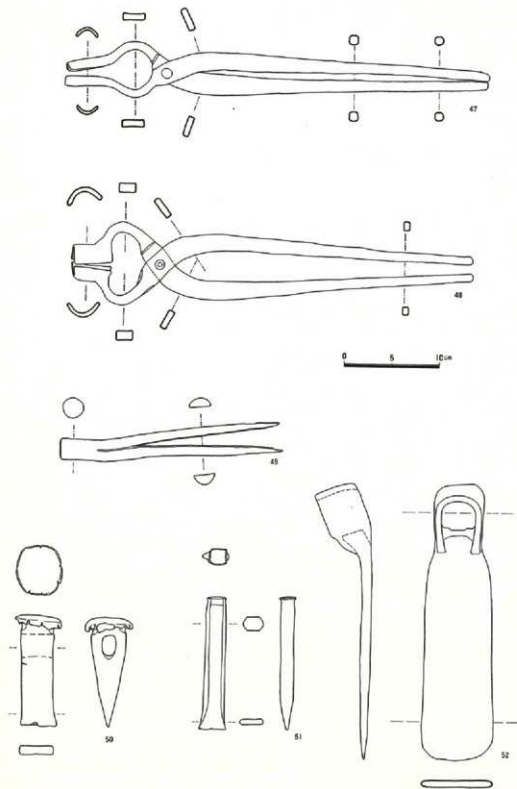


Fig. 21. 第35区出土 鍛冶用具・石切用具

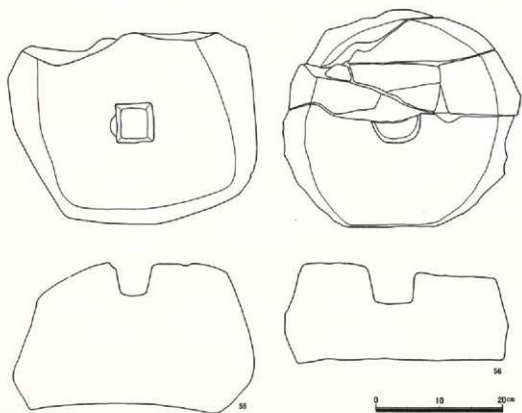
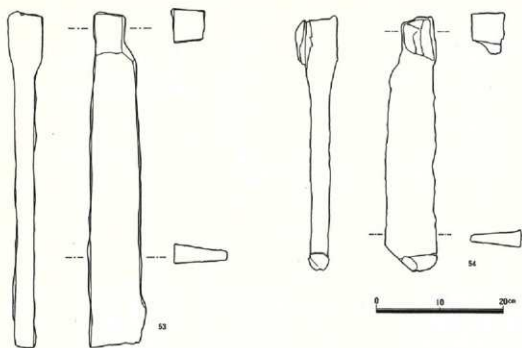


Fig. 22. 第35区出土 鉄製品・金床台

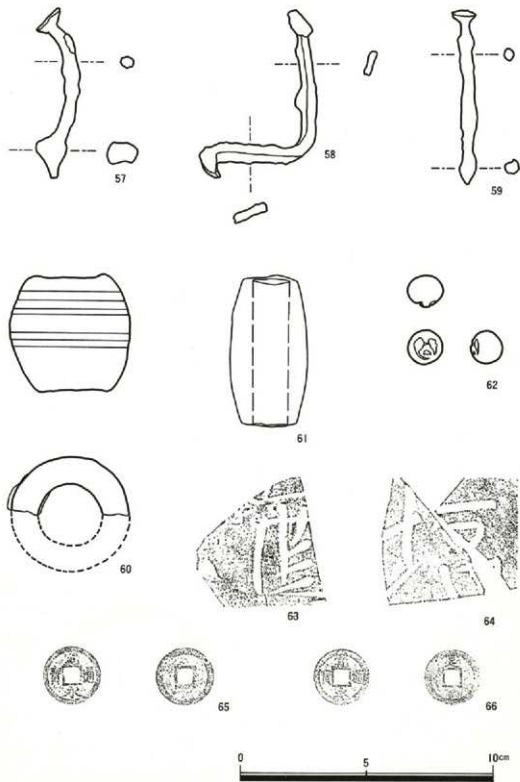
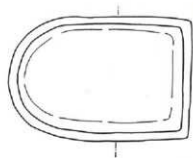
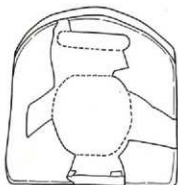
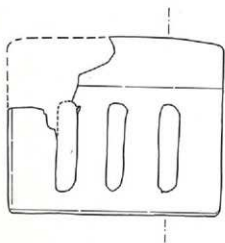


Fig. 23. 第35·38区出土遺物



67



68



Fig. 24. 第35区出土 土師質 行火

表

表1 第35区, 38区出土陶磁器観察表

遺物番号	出土地点	器形	器種	法量(cm)	形態の特徴	素地と上繪	文様と備考
1	35区 4-Cグリッド 埋層中	磁器	碗	口径11.4 器高5.4 高台径3.9 高台高0.7	口縁部が少し外反する。	白色の素地に、わずかに灰色をおびた半透明釉。 呉須は藍色。	胴部に「是」の文字文。 曇付は糖ハギ。 瀬戸系。
2	35区 4-Cグリッド	磁器	碗	口径12.0	口縁部がわずかに外反する。	灰白色の素地に、灰色の半透明釉。 呉須は青灰緑色。	胴部に縦横文。 内面口縁部に圈文。 伊万里系IV期。
3	35区 4-Cグリッド	磁器	楕口	口径7.0 器高5.8 高台径4.0 高台高0.7	口縁部が直に立ち上がる。	灰白色の素地に灰色がかかった半透明釉。 呉須はくすんだ藍色。	胴部に縁に波文。 曇付に緑色及び砂が付着。 伊万里系IV期。
4	35区 4-Cグリッド	磁器	碗	高台径3.9 高台高0.7		白色の素地にわずかに灰色をおびた半透明釉。 呉須は藍色。	胴部に「赤」母の文字文。 見込底部にくずし字。 曇付は糖ハギ。 瀬戸系。
5	35区 4-Bグリッド	磁器	碗	口径10.2 器高5.8 高台径4.7 高台高0.7	口縁部が少し外反する。	白色の素地にわずかに青みをおびた透明釉。 呉須は藍色。	秋草文(なすな)。 内面口縁部に幾何学文様。 見込に「寿」の文字文。 曇付は糖ハギ。 瀬戸系。
6	35区 4-Cグリッド	磁器	碗	口径11.6	口縁部は直に立ち上がる。	白色の素地にかすかに青みをおびた半透明釉。 呉須はにごった藍色	胴部に縁に波文。 伊万里系IV期。
7	35区 4-Cグリッド 石風の間	磁器	碗	口径10.5	口縁部がわずかに外反する。	白色の素地に白色の半透明釉。 呉須は藍色。	胴部に福東文。 瀬戸系。
8	35区 4-Cグリッド	磁器	碗	口径11.3 器高5.7 高台径4.5 高台高0.7	口縁部がわずかに外反する。	灰白色の素地に明灰色の半透明釉。 呉須はくすんだ藍色。	胴部に秋草文。 曇付に緑色及び砂が付着。 伊万里系IV期。
9	35区 4-Cグリッド 埋層中	磁器	碗	口径10.9 器高6.4 高台径4.4 高台高0.8	口縁部がわずかに外反する。	灰白色の素地に灰色がかかった半透明釉。 呉須はくすんだ藍。	胴部に縦横文波文。 見込に井筒文。 曇付に砂が付着している。伊万里系IV期。

遺物番号	出土地点	器形	器種	法量 (cm)	形態の特徴	素地と上釉	文様と備考
10	35区 4-C グリッド	磁器	碗	高台径 6.2 高台高 1.4	高高台	黄味をおびた灰白色の素地に灰色がかかった半透明釉。 外縁はくすんだ藍色。	胴部に福東文。 広東碗。 貫入がみられる。 伊万里系Ⅳ期。
11	35区 表土	磁器	紅皿	口径 5.8 器高 1.5 高台径 1.6 高台高 0.2		白色の素地に青みをおびた半透明釉。 外面は無釉。	胴部に胡荽草文。 型押し成形。 伊万里系。
12	35区 表土	磁器	碗	口径 13.1		白色の素地に透明釉。 料柄は褐色のうつし絵。	胴部に城郭図。
13	35区 4-B グリッド	土師質 土器	不明	口径 15.0		素地は薄茶。 無釉。	内面に塚付瘤。クシ目。
14	35区 4-C グリッド	陶器	徳利	不明		赤褐色の素地に暗褐色の釉。	胴部に「酒井屋」の 彫り字。 内外面にクロク目。 大鉢系。
15	38区 Dトレンチ 表土	磁器	碗	口径 9.2	口縁部が少し外反する。	白色の素地に青味をおびた半透明釉。 外縁は藍色。	内外面に秋草文。 口縁端部に圓線。 瀬戸系。
16	38区 Cトレンチ 表土	磁器	碗	口径 11.6		白色の素地に青みをおびた半透明釉。 外縁はにごった藍色。	胴部に松竹梅文。 内面口縁部に梅に流文。 伊万里系Ⅲ期。
17	38区 Bトレンチ 1層	磁器	徳利	高台径 9.0 高台高 1.4	貼り着け高台	灰白色の素地に青灰色をおびた半透明釉。 内面は無釉。 外縁はくすんだ藍色。	胴部と高台部に横線文。 壺付は輪ハギ。 伊万里系Ⅲ～Ⅳ期。
18	38区 Dトレンチ 表土	陶器	皿	口径 10.0 器高 3.1 高台径 4.4 高台高 0.3		明るい灰色の素地に明灰白色の釉。 高台及び外面底部は施釉しない。 外縁は藍色。 褐色の口縁を施す。	内外面、湯巻き文。 ピンホール及び貫入がみられる。
19	38区 表土	磁器	碗	口径 10.8 器高 5.4 高台径 4.1 高台高 0.6		白色の素地に透明の釉。 充分発色していない藍色の刷灰留。	胴部、百人一首カケタ図。壺付に砂が付着。見込にくすね松竹梅文。

遺物番号	出土地点	器形	器種	法量 (cm)	形態の特徴	素地 と 上 粧	文 様 と 備 考
20	38区 Dトレンチ 表 土	磁器	鉢	口 径23.4		灰白色の素地に灰白色の半透明釉。 青色の銅灰泥。	胴部に巻物図。 内面口縁部に唐草文。
21	38区 表 土	磁器	碗	口 径10.0 器 高 4.5 高台径 3.6 高台高 0.5		白色の素地にかすかに灰色がかった半透明釉。 黒と黄土色のプリント。	胴部に菊菊図。
22	38区 表 土	磁器	蓋	口 径 9.5 器 高 2.3	つまみを持たない山蓋。	白色の素地に灰白色の半透明釉。	外面に波に流水文の絵付。 内面に白色の細かな渦巻きを施す。 かえりに砂が付着。
23	38区 Cトレンチ 表 土	陶器	皿	口 径15.8 鉢 高 3.0		黄土がかった白色の素地に黒味をおびた黄褐色の釉。底部は釉触しない。	細かい貫入がみられる。
24	38区 A - 1 第3層中	灰釉 陶器	不明	高台径 8.0 高台高 0.5	高台は外方向に張り出し、端部は内傾する。 貼り付高台。	灰白色の素地に、胴部及び高台に灰釉を施す。 高台端部に灰釉が付着。	小砂粒を含む。 磁土巻き上げ成形か。
25	38区 Eトレンチ 表 土	陶器	不明	不 明		赤味をおびた茶色の素地にわずかに緑がかった褐色の釉。 内面は赤褐色を呈す。	大谷系。 内面にロクロ目。
63	35区 4-Cグリッド	陶器	德利	不 明		灰色の素地に黒褐色の釉。	拓影。 大谷系。 胴部に「西」の彫り字。
64	35区 灰 埴 場 4-Bグリッド	陶器	德利	不 明		灰色の素地に、暗褐色の釉。 内面は褐色を呈す。	拓影。 大谷系。 胴部に「座」の彫り字。

※伊万里系時期区分は、大橋康二氏『北海道から沖縄まで国内出土の肥前磁器』による。

Ⅲ期 1690年代～1780年代（元禄～天明）

Ⅳ期 1780年代～1860年代（天明～慶応）

表2 第38区出土土師器・弥生土器観察表

遺物番号	出土地点	器形	器種	流量 (cm)	形態の特徴	成形・調整法	備考
26	38区 A - 3 第3層中	土師器	杯	口径11.1 器高3.1	体部が直線的に開く。	・粘土巻き上げ成形。 ・内底面中央を指押え調整。 ・底部は荒切り。	淡褐色。 胎土は水漬されている。
27	38区 A - 2 第3層中	土師器	皿	不明	底部は平坦である。	不明。	淡褐色。 胎土は小砂粒を含む。
28	38区 A - 1 第3層中	土師器	皿	不明		体部外面に強いヨコナデを施す。	乳赤褐色。 胎土は微粒。
29	38区 A - 2 第3層中	土師器	皿	不明	底部は平坦である。	不明。	淡褐色。 胎土は若干の小砂粒を含む。
30	38区 A - 1 第3層中	土師器	皿	不明		体部外面に強いヨコナデを施す。	明るい褐色。 胎土は若干の小砂粒を含む。
31	38区 A - 2 第3層中	土師器	皿	不明	底部は平坦である。	内底面周縁にナデを施す。	うす黄褐色。 胎土は若干の小砂粒を含む。
32	38区 A - 1 第3層中	土師器	皿	口径18.4 器高2.0	体部の下半は内湾し 上半はわずかに外反 する弧を描く。 口縁端部を巻きこむ。		暗褐色。
33	38区 A - 2 第3層下部	土師器	皿	口径12.6 器高1.5	体部の下半は内湾し 上半はわずかに外反 する弧を描く。 口縁端部を巻きこむ。		暗褐色。
34	38区 A - 4	不明	不明	口径12.0	口辺部は外反ぎみに ゆるくカーブを描い て立ち上がる。 口縁端は下向きに拡 張し、丸まる。 口縁上端に一条の凹 線をめぐらせる。	外面、ナデ調整。	淡黄褐色。 胎土は細かい。
35	38区 A - 3	弥生	不明	不明	突出する平底である。	外面は、刷毛で調整した 後、ヘラで磨いている。 外底面はナデ調整。 底部内面に粘土を敷ぎ足 し、内面を強く指押え調 整した後、ナデ調整。	乳褐色。 胎土は粗く、石 灰、雲母を含む 小石混じりである。
36	38区 A - 4 第3層下部	弥生	不明	不明		外面にハケ目あり。 底部は押し上げている。	黄味灰色。 胎土は若干の小 砂粒を含む。

版 圖



(上) 第33区 全景写真 東より
(下) 第35区 全景写真 南より



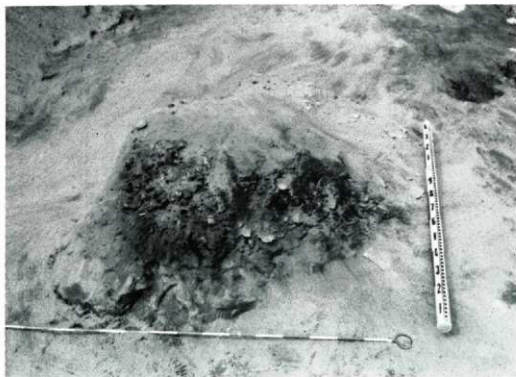
(b) 第35区 石切鍛冶仕事場跡写真 南より
(f) 第35区 石切鍛冶仕事場跡写真 西より



(E) 第35区 フィゴ場跡 (1, 2号) 写真 西より
(F) 第35区 フィゴ場跡 (1号) 写真 西より



(B) 第35区 石切鍛冶仕事場跡写真 南より
(C) 第35区 石切鍛冶仕事場跡写真 西より



(上) 第35区 フイゴ場跡写真(2号) 西より
 (下) 第35区 灰捨て場跡写真 西より



(上) 第35区 下部石列状遺構写真 南より
(下) 第35区 調査風景写真 西より



(上) 第38区 全景写真 南より
(下) 第38区 発掘前写真 東より



(上) 第38区 土塁状遺構写真 東より
(下) 第38区 土塁状遺構写真 西より



(b) 第38区 土塁状遺構写真 西より
(c) 第38区 土塁状遺構写真 東より



(上) 第38区 土壘状遺構部分写真



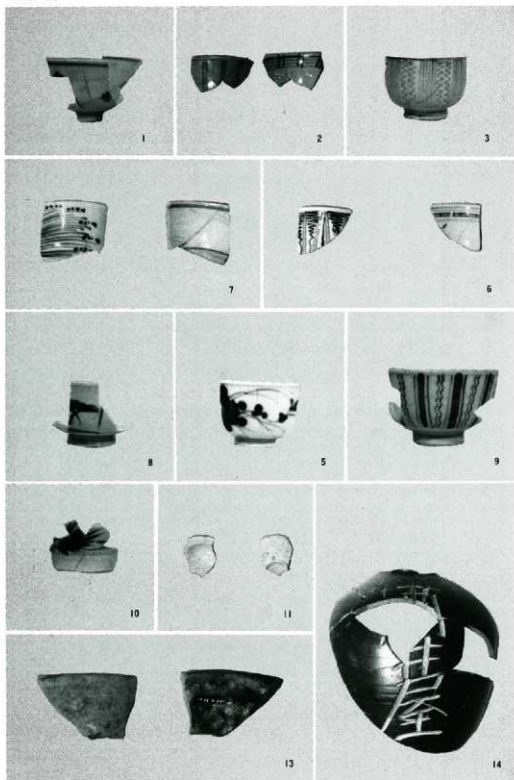
(上) 第38区 A・Bトレンチ写真 東より
(下) 第38区 Aトレンチ土層写真 西より



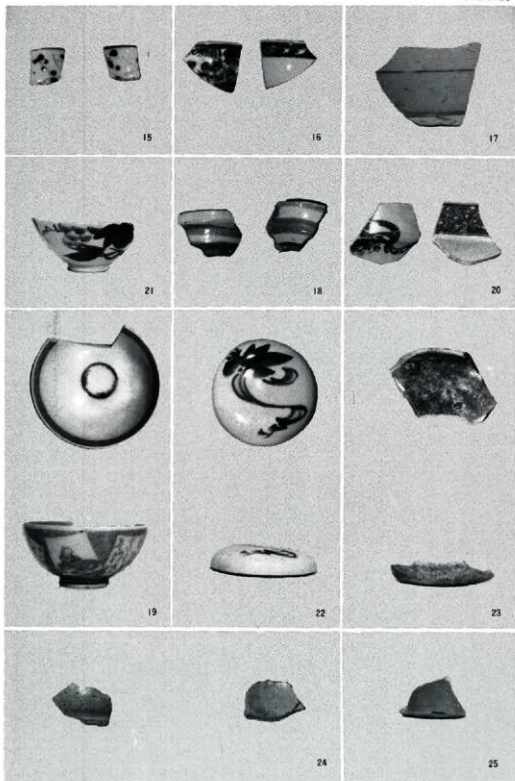
(f) 第38区 A・Bトレンチ写真 北より
(f) 第38区 Dトレンチ写真 東より



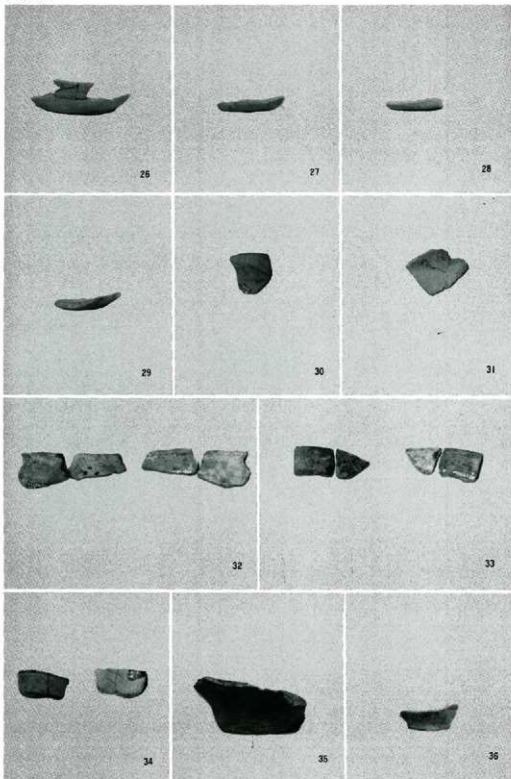
(上) 第38区 Aトレンチ土器出土状況写真



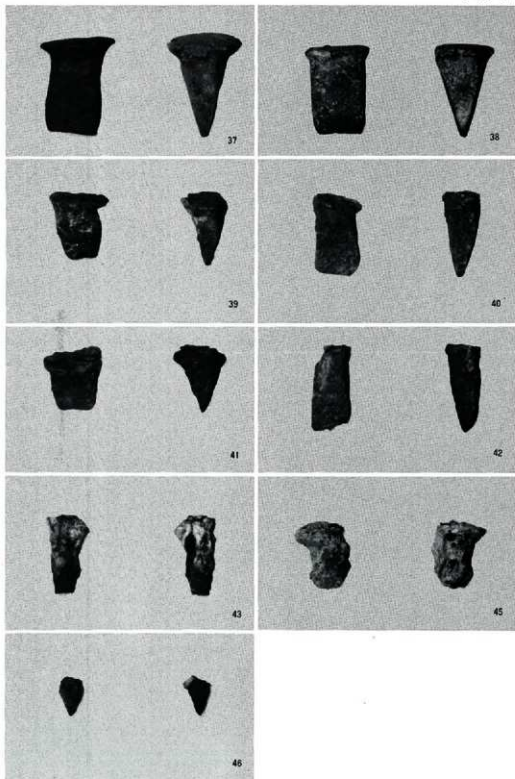
第35区出土 陶磁器



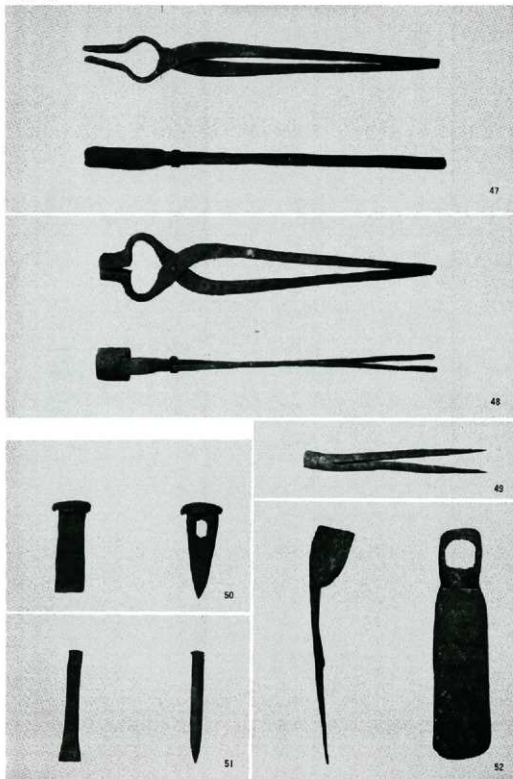
第36区出土 陶磁器



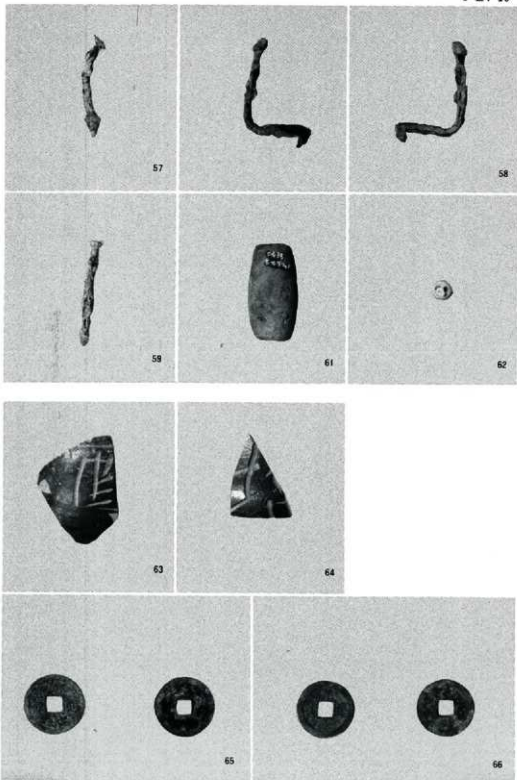
第38区出土 土師器・弥生土器



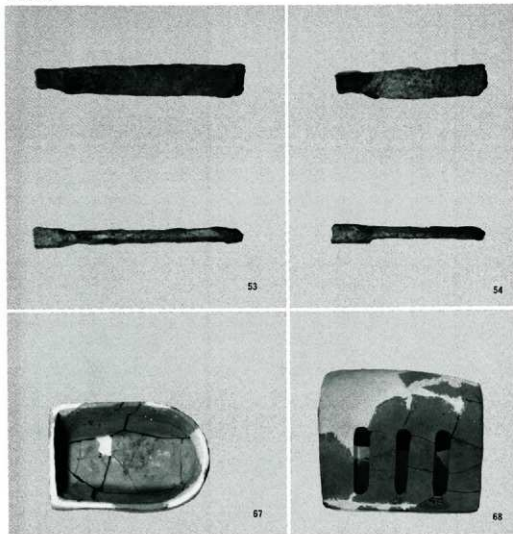
第35区出土 石切用具 矢



第35区周辺出土 鍛冶用具・石切用具



第35区出土遺物



徳島県文化財調査概報

昭和58年度
(1983)

発行年月日	昭和60年3月31日
編 集	徳島県教育委員会文化課
発 行	徳島県教育委員会
印 刷	株式会社 教育出版センター